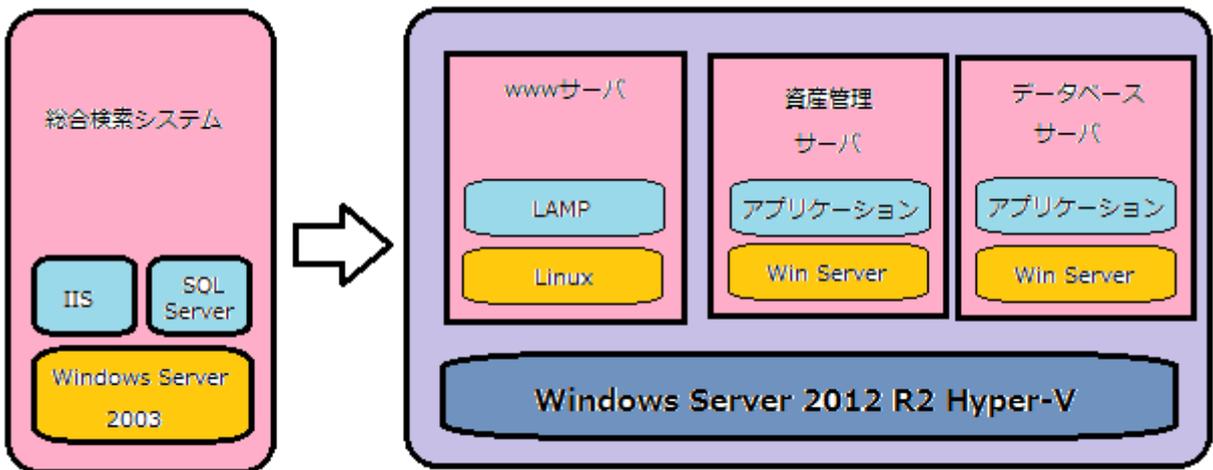


中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	文化財情報基盤の整備((1)-①)		
【事業概要】文化財関係の情報を収集して積極的に発信するため、ネットワークのセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実を図り、システムの面から文化財に関する専門的アーカイブの充実、データベースの充実を支援する。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	情報システム研究室長 二神葉子
【スタッフ】 田中淳（副所長（部長・文化財アーカイブズ研究室長兼務））、山梨絵美子（副部長）、津田徹英（文化形成研究室長）、塩谷純（近・現代視覚芸術研究室長）、小林公治（広領域研究室長）、小林達朗（主任研究員）、皿井舞（主任研究員）、城野誠治（専門職員）、橘川英規（アソシエイトフェロー）、福永八朗（アソシエイトフェロー）、小山田智寛（研究補佐員）、高橋佑太（研究補佐員） 広報委員（情報システム部会）：川野邊渉（文化遺産国際協力センター長）、各部門情報システム部会員：高砂健介（前研究支援推進部管理室長）、平出秀文（研究支援推進部管理室長）、津田徹英（文化形成研究室長）、飯島満（無形文化遺産部長）、吉田直人（保存修復科学センター主任研究員）、加藤雅人（文化遺産国際協力センター国際情報研究室長）			
【主な成果】			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 保守期限切れを迎えるネットワーク機器の更新を実施し、無線 LAN のアクセスポイントを追加した。また、仮想サーバを導入した。 ・ アクセスポイントについては接続状況を再調査し、設置が必要な場所に追加した。また、WordPress による総合検索システムの導入に伴い不要となったサーバを活用して仮想サーバ化を行い、物理的には 1 台のサーバを複数のサーバとして利用することとした。 ・ 費用対効果の面で効果的にウェブサイトの運用を行うことができたため、更新が必要な機器を前倒しで更新することができた。 			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 総合検索システムを WordPress 化し外部公開用サーバでの運用を始めたため不要となった従来の資料検索システムサーバは、更新から 2 年程度しか経過しておらず利用が可能だったため、仮想サーバ化し複数のサーバとして利用することとした。 ・ 仮想サーバの導入で物理的に 1 台のサーバを複数のサーバとして運用できるようになったため、ウィルス駆除のためのセキュリティソフトの更新状況や Windows Update の状況を監視し、セキュリティソフトに関してはリモートでの更新が行えるような管理サーバを導入することができた。 			
			
<p>仮想サーバ化により、1つの筐体で3サーバの機能を実現</p>			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 機器の更新、また、セキュリティソフトや Windows Update の更新状況の監視及びセキュリティソフトの更新が可能な管理サーバの導入によって、ネットワークの安定運用により、ウェブサイトによる情報発信のみならず、ネットワークを利用する全ての業務を支障なく行うことができるようになった。 ・ プロキシサーバのログ保管期間を 1 年に延長した。 			
【実績値】			
ネットワーク機器更新 1回			
仮想サーバ構築 1件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 処理番号

自己点検評価調書

研No.54

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	継続性			
評定	B	B	B			
判定理由 適時性：適切な時期に機器及びシステムを更新することができた。 独創性：仮想サーバの導入により、費用対効果を高めるとともに、そのひとつを管理サーバとすることでネットワーク運用の安定性を高めた。 継続性：継続的にネットワークシステムを運用することができた。						

2. 定量的評価

観点	ネットワーク機器更新	仮想サーバ構築				
評定	B	B				
判定理由 ネットワーク機器更新：当初の計画になかったものの、節約により老朽化した機器を更新することができたため。 仮想サーバ構築：従来の複数のサーバ機能を1台の仮想サーバで行えるようにし、セキュリティ管理等の効率化を高めた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	情報システムの整備については、老朽化したネットワーク機器の更新及び仮想サーバの導入によりセキュリティの強化及び高速化、費用の縮減が図られた結果、適時性、効率性、継続性が向上したと判断した。次年度以降も、ネットワークの安定運用と効率化、利便性の向上を図り、蓄積した文化財調査研究情報の公開のための環境を整備する。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当所の業務支援に資するネットワーク環境を保ち、中期計画上、順調に作業を行うことが出来た。情報システムの整備については、セキュリティの強化及び接続速度の高速化を図るに当たり、利便性を保ったうえでより効率的な運用ができるよう、ネットワーク環境の段階的な更新をさらに進めた。次年度以降も現有のスタッフの能力を最大限に活用し、ユーザの意見を適宜取り入れて費用対効果の高い機器の導入とその安定的な運用に努め、費用の削減を図る。

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	無形文化財に関わる音声・画像・映像資料のデジタル化((1)－①)		
【事業概要】	<p>無形文化遺産部が所蔵する音声・画像・映像資料のデジタル化。第1期中期計画(17年度終了)の事業案策定後の購入・寄贈にかかるアナログ資料を中心に、これまでに収集蓄積してきた分野を補完する資料の媒体転換を重点的に実施する。併せて、デジタル化を済ませた音声資料は、インデックス付与を含む整理を推進する。この事業は、将来的には資料のデータベース公開と音声・画像等の配信を目指すものである。</p>		
【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	無形文化遺産部長 飯島満
【スタッフ】	<p>高桑いづみ(無形文化財研究室長)、久保田裕道(無形民俗文化財研究室長)、菊池理予(研究員)、今石みぎわ(研究員)、佐野真規(アソシエイトフェロー)、橋本かおる(研究補佐員)</p>		
【主な成果】	<p>映像資料に関しては、前年度に引き続き、旧芸能部の年代に作成された映像資料の媒体変換を実施した。アナログ音声資料に関しては、オープンリールとカセットテープについて、収録内容の確認を含めた整理を行った。無形文化遺産部所蔵資料の内、稀少性の高い刊行年代が昭和30年代に溯る紙媒体資料のデジタル化に向けて所蔵調査を行った。</p>		
【年度実績概要】	<p>映像資料については、16ミリ(カラー)3本、『竹富島の種子取り』第1部・第2部と『雪まつり』の媒体変換を行い、HDCAM3本を作成した。 音声記録のデジタル化は、前年度に引き続き、1960年代に放送された邦楽関連のテープ録音を中心に収録内容を確認し、インデックス付与済みCDを21枚作成した。 カセットテープに関しては、旧芸能部所蔵テープの内、寺事の現地録音を中心に内容確認を行った。 無形文化遺産関連の映像資料205枚(作成DVD82枚・作成BD123枚)を所蔵資料として新たに登録した。 紙媒体資料に関しては、電子化を予定している『歌舞伎新聞』と『月刊 前進座』の2紙について調査し、前者は創刊号(昭和28年12月)から253号(昭和49年12月)、後者は123号(昭和35年1月)から393号(昭和57年10月)の所蔵を確認した。ともに所蔵機関は限定されており、かつ昭和30年代から40年代にかけては欠号なく揃っていること自体が極めて稀であることが判明した。</p>		
			
	<p>【デジタル化した昭和49年撮影の記録映画『竹富島の種子取り』より】</p>		
【実績値】	<p>HDCAM(映像資料)3本 CD(音声資料)21枚 DVD・BD(映像資料)205枚</p>		
【備考】	<p> </p>		

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 6112

自己点検評価調査

研No.55

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	継続性	発展性		
評定	B	B	B	B		
判定理由 適時性：経年劣化が深刻化する前に、稀少な紙媒体資料の電子化に向けて、調査を完了することができた。 独創性：他の公的機関では所蔵されていない資料の恒久的な利用に向け、処理を行っている。 継続性：アナログ資料の継続的な媒体変換とともに、資料整理も着実に進めている。 発展性：将来の資料公開に備え、資料の蓄積に努めている。						

2. 定量的評価

観点	HDCAM (映像資料)	CD (音声資料)	DVD・BD (映像資料)			
評定	B	B	B			
判定理由 CD（音声資料）・DVD等（映像資料）・HDCAM（映像資料）：これまで集積してきたものを補完するような資料の整理が進められており、より充実した無形文化遺産アーカイブを構築することができた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	定性的評価、定量的評価ともに、これまでの水準を維持していることに加え、昭和30年代から40年代に刊行された稀少な紙媒体資料についてもデジタル化作業に着手することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	事業は、従来水準を維持している。また、将来的なデータベース公開へ向け、資料作成を着実に進めている。アナログテープ（オープンテープ）のデジタル化に関しては、23年度（中期計画初年度）に予定していた分量をほぼ完了する予定である。なお、中期計画策定後に寄贈されたアナログテープについては、次期中期計画での電子化を計画している。

中期計画の項目	6 情報発信機能の強化
プロジェクト名称	文化財に関するデータベースの充実(①-①)

【事業概要】
文化財情報の特性について具体的な資料の研究に基づいて検討を加え、それに最も適した電子化・情報化の方法を探り実際のデータベース入力を進める。

【担当部課】	企画調整部	【プロジェクト責任者】	企画調整部長 杉山洋
--------	-------	-------------	------------

【スタッフ】
森本晋（文化財情報研究室長）

【主な成果】
GIS（地理情報システム）を活用した文化財情報の取得・分析に関する研究を行うとともに、成果を学会で発表している。文化財情報の電子化に関する研究を基に開発・改良を継続している各種データベースについて、業務用とともに公開用についても、記載方法の標準化を進めながらデータの充実を図った。

- 【年度実績概要】
- 文化財情報電子化の研究として報告書に関するデータベースの問題を扱い、成果を26年10月21日に「太平洋近隣友好協会大会」(PNC)で発表した。GISの技術を活用した考古情報の分析に関する調査研究を行い、成果を26年11月8日に地理情報システム学会で発表した。資料調査として関連学会の中でも重要な「考古学におけるコンピューターの応用と数量的方法」(CAA)に26年4月21日から25日に参加した。
 - 文化財情報データベースの充実として、従来より進めている遺跡、写真、報告書抄録、航空写真、図面画像、考古関連雑誌論文情報補充のデータベースについてデータの入力・更新を行うとともに、新規に考古関連雑誌論文情報補充データベースを一般公開した。



考古関連雑誌論文情報補充データベース

【実績値】
研究発表件数 2件 (①~②)
(参考値)
データベース件数 26年末 ただし () 内は平成25年度末の値
全文 213,667 (213,535)、木簡 159,834 (151,121)、抄録 84,562 (78,725)、写真 542,402 (448,922)、遺跡 479,239 (478,763)、航空写真 1,374,612 (1,353,481)、図面画像 172,123 (97,265)、考古関連雑誌論文情報補充 71,891 (36,428)

【備考】
研究会発表
①Susumu MORIMOTO, Total Informatization of Archaeological Excavation Reports in Japan (ポスター), PNC2014, 2014.10.21
②村尾吉章・碓井照子・森本晋・清水啓治・藤本悠・清野陽一・玉置三紀夫「遺構情報モデルに基づいた不確かな時間属性の適用」『日本地理情報システム学会第23回研究発表大会予稿集』2014.11.7

【書式B】
(様式2)施設名 処理番号

自己点検評価調査

研No.56

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
<p>判定理由</p> <p>適時性: データ入力にあたっては、刊行後間もない発掘調査報告書の記述も参照しており、十分に成果が認められた。</p> <p>独創性: 当研究所独自のデータベースを開発・整備して研究に資するとともに、公開用データベースを充実させており、独創性は十分に成果が認められた。</p> <p>発展性: 新規のデータベースを開発し関連する調査研究も進めており、十分に成果が認められた。</p> <p>効率性: データベースの種類が増加しても入力の効率化で対応しており、十分に成果が認められた。</p> <p>継続性: 各種データベースを最新情報に更新しながら、広く継続的に公開提供しており、十分に成果が認められた。</p> <p>正確性: データ入力に際し、典拠資料や関連文献の調査を行っており、正確性を十分に担保できた。</p>						

2. 定量的評価

観点	研究発表件数					
判定	B					
<p>判定理由</p> <p>研究発表件数: 継続的な研究の成果を年間1件ないし2件、早期に公表するという予定を満たしており、目標を達成している。</p>						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本事業は、適時性・独創性・発展性・効率性・継続性・正確性のいずれの観点においても、十分な水準を維持しており、総合的にBと判定した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	各データベースにおいて、着実にデータの充実が進んでおり、新規データベースの公開も行うことができた。全体として当初計画通りに進捗し所期の目標を達成しているためBと判定した。

業務実績書

研No.57

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	被災文化財関連情報に関するデータの蓄積・分析及び情報発信(①-②)		
【事業概要】被災文化財関連情報に関するデータベースの充実とアーカイブ機能の更新と拡張を図る。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	情報システム研究室長 二神葉子
<p>【スタッフ】</p> <p>田中淳(副所長(部長・文化財アーカイブズ研究室長兼務))、山梨絵美子(副部長)、福永八朗(アソシエイトフェロー)、小山田智寛(研究補佐員)</p> <p>文化財レスキュー旧事務局・日報担当:</p> <p>皿井舞(主任研究員)、菊池理予(無形文化遺産部研究員)、久保田裕道(無形民俗文化財研究室長)、今石みぎわ(研究員)、岡田健(保存修復科学センター長)、森井順之(主任研究員)、江村知子(文化遺産国際協力センター主任研究員)</p>			
<p>【主な成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> 文化庁委託事業「文化財(美術工芸品)等緊急保全活動・現況調査事業」と連携し、文化財レスキュー事業によって蓄積された情報の分析と発信について検討を行った。 文化財レスキュー事業実施時に撮影された画像について、そのデータベース化と共有のためのシステムを構築し、所内で公開した。また、シンポジウムや報告書などの調査研究成果をウェブで発信した。 従来は困難であった画像の検索を、テキストと関連させることで可能とし、またウェブデータベース化することで遠隔地との共有を可能とした。また、文化財レスキュー事業に関する情報を共有することができた。 			
<p>【年度実績概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> 文化財レスキュー事業実施時に撮影された画像のデータベース化について、所内にて随時検討を行った。 23年度に撮影された画像について、記録されているExifデータ(撮影時に自動的に画像自体に添付されているデータ)、及びExifデータに記録された撮影日時を用いて作業日報のIDと連携させ、ファイル名とあわせてExcelデータを作成した。このデータと画像データをWordPressによりデータベース化し、所内ウェブサイトで共有した。また、関係者に限定した情報共有のための仕組みについて検討し、ユーザIDとパスワードの設定により、情報公開の可否や公開レベルの設定が可能であることを確認した。 			
			
<p>Wordpress によるデータベースの画面の例</p>			
<ul style="list-style-type: none"> 文化庁委託事業「文化財(美術工芸品)等緊急保全活動・現況調査事業」の一環として26年12月4日に開催した研究会「これからの文化財防災-災害への備え」の記録及び当該事業の報告書をウェブサイトで公開した。 画像データベースの所内ウェブサイトでの公開と、公開レベルの設定の確認により、遠隔地の関係者との、また関係者に限定した情報共有が可能であることがわかった。 シンポジウムの記録及び報告書の公開により、文化財レスキュー事業に関する情報を広く発信することができた。 			
<p>【実績値】</p> <ul style="list-style-type: none"> データベース作成件数 1件 			
<p>【備考】</p>			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 6121

自己点検評価調査

研No.57

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：23年の東北地方太平洋沖地震の発生から4年が経過したに過ぎず、東海・東南海地震の発生が近いとされている現在、文化財レスキュー事業に関する情報を整理・公開することは時宜にかなっている。 独創性：テキストデータと異なり整理が困難な画像データについて、多数の画像から一括でExifデータをデータ化し、また作業日報と関連付けてデータベース化した。 発展性：作業日報と関連付けた画像データベースの構築により、文化財レスキュー活動に関する各種の分析に活用できるようになった。 効率性：データの手入力を極力減らし、Exifデータを一括で書きだすようにして効率化を図った。また、使用するソフトウェアは別途購入するのではなく、既存の汎用のソフトウェアや無料のものを用い、また外注ではなく内製とすることで、人件費及び物件費の別途の支出はほとんどなかった。 継続性：画像インデックス等の入力作業及びデータ分析を継続して実施した。 正確性：効率性のところでも触れたように、手作業でなくソフトウェアの機能により一括で必要な情報を得ることで、誤入力の発生を減らした。また、複数の人間が校正を行った。						

2. 定量的評価

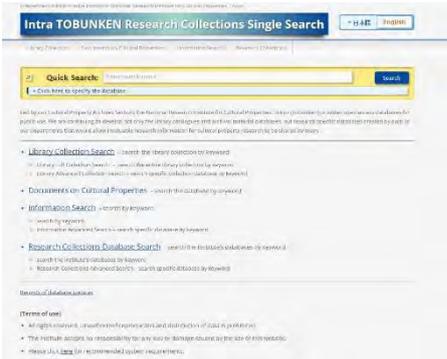
観点	データベース 作成件数					
評定	B					
判定理由 データベース作成件数：情報共有のための画像データベースを1件作成し、年度目標を達成することができた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	定性的、定量的評価いずれについても初期の目標を達成していると考えた。次年度以降についても引き続き、文化財レスキュー事業で蓄積した情報を中心とした情報の分析と関係者間での共有及び発信を継続する。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財レスキュー事業に関する情報をまとめ、関係者間での共有のための仕組みを構築するとともに、成果を公開することができた。次年度も資料の蓄積や共有、発信を行い、文化財レスキュー事業に関する分析を行うことで、今後の文化財防災に役立つ資料を提供していく。

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	専門的アーカイブの充実（資料閲覧室運営）（1）-③		
【事業概要】			
<p>文化財関連資料の公開機関としての周知の広がりをつまみ、①受け入れた文化財関連の図書などの文字資料や、作成したアナログ・デジタル画像資料の登録管理、②閲覧室で一般利用者を対象とした週3回（月・水・金）の所蔵資料の提供、③データベースの作成、検索システムの構築並びにウェブサイト上での諸情報の提供を通常業務とするとともに、提供する資料や情報の質に主眼を置き、より専門性の高い文化財関連資料や情報の収集・構築・公開の場として専門的アーカイブの充実を図る。</p>			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	副所長（部長・文化財アーカイブズ研究室長兼務） 田中淳
【スタッフ】			
<p>山梨絵美子（副部長）、二神葉子（情報システム研究室長）、小林公治（広領域研究室長）、津田徹英（文化形成研究室長）、塩谷純（近・現代視覚芸術研究室長）、小林達朗（主任研究員）、皿井舞（主任研究員）、安永拓世（研究員）、城野誠治（専門職員）、橘川英規（アソシエイトフェロー）、福永八朗（アソシエイトフェロー）、飯島満（無形文化遺産部長）、佐野千絵（保存修復科学センター保存科学研究室長）、吉田千鶴子（東京藝術大学非常勤講師・客員研究員）</p>			
【主な成果】			
<p>資料閲覧室の運営、並びに資料の登録と情報のデータベース化、またそれを利用した外部公開用 SQL データの更新・運用を行った。</p>			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・資料閲覧室を公開運営した（合計 139 日、利用者数のべ 1015 人）。 ・資料の登録と情報のデータベース化を継続した。 ・引き続き関係各部署の協力を得て貴重書のデジタル化を進めた。 ・情報を外部公開データベースに登録し、基礎情報を一般に提供した。 ・セインズベリー日本藝術研究所との「日本芸術研究の基盤形成のための事業」を継続し、VPN 回線を通じて東京文化研究所刊行物アーカイブシステムに、セインズベリー日本藝術研究所が収集した欧米圏の日本美術関連情報の入力を開始した。 ・26 年 10 月には皿井主任研究員がセインズベリー日本藝術研究所に赴き、システム及びデータ収集に関する協議を行い、あわせてセインズベリー日本藝術研究所の要請により、平安時代彫刻史に関する講演を行った。 ・地方公共団体が刊行する文化財関連報告書のうち、東北地方及び関東地方の情報収集を終えた。 ・田中副所長及び橘川アソシエイトフェローが実行委員として、JAL プロジェクト（委員長：加茂川幸夫東京国立近代美術館長）に参加し、招聘者の事前ヒアリング・研修における各種ガイダンス及び随行など、海外の美術資料専門家との交流・情報交換を行った。 ・前年度運用を開始した「文化財関係文献データベース（統合試行版）」に情報を追加し、東京文化財研究所定期刊行物のうち『保存科学』『芸能の科学』『無形文化遺産研究報告』の PDF の検索・閲覧を可能にした。 			
			
東文研総合検索の英文トップページ			
【実績値】			
<p>研究協議会の開催数 4 回 資料受入数：和漢書 2459 件、洋書 18 件、展覧会図録・報告書等 4621 件、雑誌 3279 件（合計 10388 件） データベース公開件数：東文研総合検索 1 件（22 件のデータベースを統合したもの。） 閲覧室利用状況：公開日総数 139 日・利用者年間合計 1015 人</p>			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 処理番号

自己点検評価調査

研No.58

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：資料閲覧室の公共性と特徴に則った運営をすることができた。 独創性：有形・無形の文化財を含む東京文化財研究所の業務に密着し、特徴あるデータ整理を行っている。 発展性：セインズベリー日本藝術研究所との共同研究やJALプロジェクトにより国外との連携を促進した。 効率性：細分化されたデータベースの統合を目指し、効率的にデータを作成することができた。 継続性：研究基盤の形成のために継続性を重視し、中長期的視野に立って業務を行っている。 正確性：文化財専門機関として、精度の高いデジタル情報作成を期し、正確な情報提供を実践している。						

2. 定量的評価

観点	研究協議会の開催数	資料受入数	データベース公開件数	閲覧室利用状況		
判定	B	B	B	B		
判定理由 研究協議会の開催数：4回 資料受入数：和漢書2459件、洋書18件、展覧会図録・報告書等4621件、雑誌3279件（合計10388件） データベース公開件数：「文化財関係文献データベース（統合試行版）」に情報を追加し、東京文化財研究所定期刊行物のうち『保存科学』『芸能の科学』『無形文化遺産研究報告』のPDFの検索・閲覧を可能にした。 閲覧室利用状況：公開日総数139日・利用者年間合計1015人 いずれも十分なものと判断する。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	実施計画に沿って遂行することができた。セインズベリー日本藝術研究所との協力関係についても、実質的なデータベース作成をすすめることができた。 また、「文化財関係文献データベース（統合試行版）」に情報を追加し、東京文化財研究所定期刊行物のうち『保存科学』『芸能の科学』『無形文化遺産研究報告』のPDFの検索・閲覧を可能にした。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	資料閲覧室の運営を順調に行うことが出来、また海外との交流を深めて海外発信力強化のための具体的な手がかりを得ることができた。次年度以降には、データベースの拡充、海外発信力の更なる強化とあわせて、公開する資料を増加、充実させたい。

業務実績書

研No.59

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	図書の収集・整理・公開・提供（(1)～③）		
【事業概要】			
文化財に関する資料・図書を計画的に収集・整理し、外部の研究者及び一般の利用者に積極的に公開・提供するための方策を検討し、実施する。			
【担当部課】	研究支援推進部連携推進課	【プロジェクト責任者】	連携推進課長 田中康成
【スタッフ】			
渡 勝弥(課長補佐)、伊藤久美、山内章子、中西晶子、堀内千嘉、井上江理奈、永岡美和、太田淳士(以下、文化財情報係事務補佐員)			
【主な成果】			
遺跡の発掘調査報告書、歴史的建造物の修理報告書等歴史・考古学分野を中心に図書・逐次刊行物の購入及び寄贈による収集を行い、整理された資料をデータベースに蓄積してインターネットに公開した。また、図書館システムをクラウド化することにより、サーバの維持管理を省力化することができた。			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 図書等の収集・整理： 遺跡の発掘調査報告書、歴史的建造物の修理報告書等歴史・考古学分野を中心とする資料の収集・整理を行った。また、国立情報学研究所が構築しているオンライン共同分担目録方式による全国規模の総合目録データベース(NACSIS-CAT)への新規及び遡及入力継続等、所外の利用者への情報提供を行った。 図書資料以外では、発掘調査関係の遺跡、建造物、庭園等の写真の収集、整理を行った。 ・ 利用者サービス： 歴史・考古学分野を中心に図書・逐次刊行物等を一般公開施設として広く利用に供し、遠隔地からの図書利用については、国立情報学研究所が行っている NACSIS-ILL を通じて文献複写・現物貸借サービスを行った。 ・ 図書館システムメーカーのクラウドサーバを利用して10月1日に新図書館システムを本稼働させた。これにより、従来、職員が行っていたサーバの維持管理の省力化が可能となった。 			
			
仮設庁舎書庫			
【実績値】			
(参考値)			
受入数：			
購入図書	871 冊		
寄贈図書	6,782 冊		
雑誌	1,215 タイトル		
写真	13,554 点		
利用者サービス：			
一般利用者数	531 人		
利用冊数	3,613 冊		
来館者複写件数	774 件		
遠隔利用：			
複写受付件数	567 件		
貸借貸出冊数	79 冊		
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 6132

自己点検評価調書

研No.59

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性	正確性	
評定	B	B	B	B	B	
判定理由 適時性：請求のあった図書資料等の提供及び購入希望のあった図書資料等を積極的に収集・整理を行い、公開を行った。 発展性：図書館システムを更新したことにより、最新のブラウザへの対応が可能となり、更なるサービスの向上が見られた。 効率性：サーバの維持管理を省力化することができた。 継続性：図書資料等の収集・整理・公開を滞ることなく遂行した。 正確性：受け入れた図書資料等に適切な分類を施し、適切な場所への保管を行った。						

2. 定量的評価

観点						
評定						
判定理由						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	図書の収集・整理・公開・提供という業務において、毎年同じ業務を継続して行うことこそが最優先課題であり、独創性及び発展性を望むことは混乱を招く元となり得るが、本年度は図書館システムを更新したことにより、発展性と効率性を向上させることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信という項目を滞ることなく遂行した。 停滞することなく図書資料等の収集・整理・公開・提供を行えたことは、中期計画を遂行するうえで最良の結果であると思われる。

業務実績書

研No.60

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行（年報、概要、ニュース）（(2)－①）		
【事業概要】			
<p>本プロジェクトは研究所の業務に関する情報発信のうち特に紙媒体である『年報』『概要』『ニュース』、及び不定期に作成するパンフレットなどの編集・刊行を実施する。また、エントランスにおけるパネル展示などを通じて、来訪者に対しても研究所の活動をわかりやすく伝えることを目指す。</p>			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	情報システム研究室長 二神葉子
【スタッフ】			
<p>田中淳（副所長（部長・文化財アーカイブズ研究室長兼務））、山梨絵美子（副部長）、津田徹英（文化形成研究室長）、塩谷純（近・現代視覚芸術研究室長）、小林公治（広領域研究室長）、小林達朗（主任研究員）、皿井舞（主任研究員）、安永拓世（研究員）、城野誠治（専門職員）、橘川英規（アソシエイトフェロー）、福永八朗（アソシエイトフェロー）、小山田智寛（研究補佐員）、高橋佑太（研究補佐員）</p> <p>広報委員（概要）：岡田健（保存修復科学センター長） 各部門概要担当：今城裕香（研究支援推進部管理室企画渉外係員）、塩谷純（企画情報部近・現代視覚芸術研究室長）、高桑いづみ（無形文化遺産部無形文化財研究室長）、早川典子（保存修復科学センター主任研究員）、友田正彦（文化遺産国際協力センター保存計画研究室長）</p> <p>広報委員（年報）：田中淳 各部門年報担当：平出秀文（研究支援推進部管理室長）、今城裕香、小林公治、久保田裕道（無形文化遺産部無形民俗文化財研究室長）、佐野千絵（保存修復科学センター保存科学研究室長）、山内和也（文化遺産国際協力センター地域環境研究室長）</p> <p>広報委員（東文研ニュース）：山梨絵美子、今城裕香、津田徹英、菊池理予（無形文化遺産部研究員）、早川泰弘（保存修復科学センター分析科学研究室長）、江村知子（文化遺産国際協力センター主任研究員）</p>			
【主な成果】			
<ul style="list-style-type: none"> ・『年報』2013年度版、『概要』2014年度版を編集、刊行した。また、『東文研ニュース』を年3回刊行した。さらに、エントランスロビーパネル展示を更新した。 ・東京文化財研究所による研究成果をまとめるとともに、わかりやすく発信することができた。 ・東京文化財研究所への来訪者や、訪問先の関係者に対する研究成果の説明について有効に活用することができた。 			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・『年報』2013年度版の刊行 <ul style="list-style-type: none"> 2014年6月30日付で『年報』を刊行した。2013年度版の構成は従来通り、機構、年度計画及びプロジェクト報告、その他の研究活動、個人の研究業績、研究交流、主な所蔵資料、研究所関係資料、東京文化財研究所プロジェクト、索引とした。刊行にあたっては、各部・センターの年報担当者が原稿のとりまとめを行った。 ・『概要』2014年度版の刊行 <ul style="list-style-type: none"> 『概要』2014年度版を刊行した。各ページの構成の決定や原稿のとりまとめについては、各部・センターの概要担当者が行った。 ・『東文研ニュース』の刊行 <ul style="list-style-type: none"> 『東文研ニュース』を年3回刊行した。基本的には、ウェブサイトに掲載した活動報告から四半期ごとの記事を掲載しているが、掲載する記事は各部・センターで選択している。ページ数は固定せず原稿の多寡によって自由に構成し、記事の配置については会議や研究会と現地調査とがバランスよく並ぶようにして見た目の印象にも配慮した。この他、東文研ニュースには、特定のトピックについてまとめた紹介を行うコラムや刊行物の案内、人事異動などを掲載している。 ・エントランスロビーパネル展示の実施 <ul style="list-style-type: none"> エントランスロビーに研究成果を伝えるためのパネルを作成し、展示した。26年度は前年度予算で作成した文化遺産国際協力センターによる「海外の文化財を守る日本の伝統技術」と題したパネルを4月21日に設置・展示している。また、26年度末に保存修復科学センターによる近代文化遺産の保存修復に関するパネルを作成し、3月30日に展示した。 			
【実績値】			
<p>刊行物数 計 8,900 部</p> <ul style="list-style-type: none"> 『東京文化財研究所年報』2013年度版 500 部 『東京文化財研究所概要』2014年度版 2,700 部 『東文研ニュース』55 2,500 部、同 56,57 号 各 1,600 部 			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 6211

自己点検評価調査

研No.60

1. 定性的評価

観点	適時性	効率性	継続性	正確性		
評定	B	B	B	B		
<p>適時性：刊行物を年度目標数発行し、ロビー展示も年度目標に従って行うことができた。</p> <p>効率性：『年報』・『概要』・『東文研ニュース』について配布先の見直しを行うことで印刷部数を削減し、経費削減に努めた。</p> <p>継続性：継続的に刊行物を作成した。</p> <p>正確性：『概要』・『年報』『東文研ニュース』は5回程度の校正をそれぞれ実施することで、情報の正確性を維持した。</p>						

2. 定量的評価

観点	刊行物数					
評定	B					
刊行物数：前年度に引き続き配布実績に基づく部数の削減を行うことで、適切な部数を刊行することができた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	年度計画通りに刊行物を作成し、ロビー展示を行うことができた。26年度に広報委員会関連の規則が改訂され、各部会員の役割が明確にされた。次年度はさらに各部会員への連絡を徹底し、効率的な業務の進行を図りたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画どおり概要、年報の刊行を順調に実施することができた。『東文研ニュース』については和英併記とし、コラムにも英文アブストラクトをつけることで内容の充実が図られ、当初予定の年4回刊行を達成することができ、適時性を持った改善を行うことができている。次年度以降も、概要・年報・東文研ニュースによる情報発信を継続するとともに、より効果的な情報発信の方法について検討し、ウェブサイトその他インターネットによる情報発信との連携にも努める。

業務実績書

研No.61

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行 (『平成 25 年版日本美術年鑑』、『美術研究』) (2) - ①		
【事業概要】 各年の美術活動と美術研究、批評の状況を記録するために、昭和 11 年以来刊行を続けている『日本美術年鑑』を年 1 冊刊行するとともに、昭和 7 年 1 月以来、日本・東洋の古美術、日本の近代・現代美術等に関わる研究論文・図版解説・書評、展覧会評、研究資料、研究ノート等を掲載する『美術研究』を年 3 冊刊行する。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	近・現代視覚芸術研究室長 塩谷純
【スタッフ】 田中淳 (副所長 (部長・文化財アーカイブズ研究室長兼務))、山梨絵美子 (副部長)、二神葉子 (情報システム研究室長)、小林公治 (広領域研究室長)、津田徹英 (文化形成研究室長)、小林達朗 (主任研究員)、皿井舞 (主任研究員)、安永拓世 (研究員)、橘川英規 (アソシエイトフェロー)、河合大介 (アソシエイトフェロー)、江村知子 (文化遺産国際協力センター主任研究員)、中野照男 (客員研究員)、三上豊 (和光大学教授・客員研究員)、近松鴻二 (学習院大学非常勤講師・客員研究員)、吉田千鶴子 (東京藝術大学非常勤講師・客員研究員)			
【主な成果】 本年度は、『平成 25 年版 日本美術年鑑』及び『美術研究』413~415 号を刊行した。			
【年度実績概要】			
①『平成 25 年版 日本美術年鑑』 B5 版 (27 年 3 月) 2012 (平成 24) 年美術界年史、美術展覧会 (企画展、作家展、団体展)、美術文献目録 (定期刊行物所載文献、美術展覧会図録所載文献 (企画展、作家展))、物故者			
②『美術研究』413 号 (26 年 11 月)			
<ul style="list-style-type: none"> ・佐藤全敏「観心寺如意輪観音像 再考」 ・崔燁 (日比野民蓉訳)「近代における仏教界と仏画の制作」 ・小林公治「展覧会評 二〇一三年開催の南蛮漆器に関する展覧会から—Lacas Namban 展 (マドリッド) と「伊達政宗の夢」展 (仙台) —」 ・植野健造「研究資料 新出資料紹介『第八回白馬会出品目録』」 ・企画情報部報 			
③『美術研究』414 号 (27 年 2 月)			
<ul style="list-style-type: none"> ・津田徹英・丸川雄三・中村佳史・吉崎真弓・橘川英規「研究ノート ウェブ版『みづゑ』の研究—美術資料のデジタル公開と美術アーカイブズへの展望」 ・津田徹英「研究資料 滋賀・菅山寺蔵 十一面観音菩薩立像」 ・綿田稔・土屋貴裕・江村知子「研究資料 続稀蹟雑纂—ポートランド美術館所蔵作品簡解 (一) —」 ・染谷香里「研究資料 画伝幼学 絵具彩色独稽古 (天保五年)」 ・吉田千鶴子「研究資料 黒田清輝宛外国人留学生書簡 影印・翻刻・解題」 			
④『美術研究』415 号 (27 年 3 月)			
<ul style="list-style-type: none"> ・李相南 (安在媛 訳)「毛利博物館所蔵 韓国遺物を通してみる初期朝鮮王朝物質文化交流—大内氏と毛利氏を中心にして—」 ・藤川 哲「ビエンナーレのかたち—かたち=イメージ—」 ・佐藤直樹「かたちをめぐる日本美術史の可能性—西洋美術史からの視点—」 ・加治屋健司・上崎 千・橘川英規「研究ノート アート・アーカイヴの諸相」 ・江村知子「研究資料 続稀蹟雑纂—ポートランド美術館所蔵作品簡解 (二) —」 ・児島 薫「藤島武二による黒田清輝、久米桂一郎宛書簡について(一)」 ・児島 薫「黒田清輝、久米桂一郎宛藤島武二書簡 影印・翻刻・解題」 			
			
②『美術研究』413 号 (26 年 11 月)			
【実績値】			
刊行数 1,800 部			
『日本美術年鑑』(①) 600 部、『美術研究』(②~④) 各 400 部			
配布部数 1,740 部			
『日本美術年鑑』600 部、『美術研究』各 380 部			
【備考】			
①『平成 25 年版 日本美術年鑑』東京文化財研究所 2015. 3			
②『美術研究』413 号 東京文化財研究所 2014. 11			
③『美術研究』414 号 東京文化財研究所 2015. 2			
④『美術研究』415 号 東京文化財研究所 2015. 3			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 6212

自己点検評価調査

研No.61

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
評定	B	B	B	B	B	
<p>判定理由</p> <p>適時性、独創性、発展性： (『美術研究』の刊行) ・海外編集委員によって推薦された韓国語圏と中国語圏で発表された論文を翻訳し掲載することで、広く東アジアにおいてどのような問題が最新のテーマとして文化財研究の俎上にあがっているかを提示した。 ・話題となった南蛮漆器の二つ展覧会「<i>Lacas Namban</i> 展 (マドリッド)」と「伊達政宗の夢」展 (仙台)」を展覧会評として取り上げ、今後の研究動向と展望を示した。 ・これまで全容が知られていなかった『第八回白馬会出品目録』を新出資料として紹介した。また、「黒田清輝宛外国人留学生書簡」を影印とともに翻刻・解題を付して公表した。さらに、所員の調査によってその存在が注目された、滋賀・菅山寺十一面観音菩薩像、ポートランド美術館所蔵の注目すべき日本絵画作品を「研究資料」として紹介した。</p> <p>(『日本美術年鑑』の刊行) ・平成12～24年版に掲載された物故者記事の執筆者に当研究所ウェブサイト掲載のための許諾をとり、ウェブ上での公開に向けて準備を行った。</p> <p>いずれも適時性・独創性・発展性において十分に成果が認められた。</p> <p>継続性・正確性： ・1936 (昭和11) 年以来刊行を続けている『日本美術年鑑』において、2012年の美術界に関する基礎データの集成に努め、成果が認められた。 ・1932 (昭和7) 年の創刊以来、日本・東洋の古美術、並びに日本近代・現代の美術とこれらに関連する西洋美術についての論文・研究ノート・図版解説・展覧会評・研究資料などを掲載する『美術研究』を計画通り年度内に3冊刊行した。</p>						

2. 定量的評価

観点	刊行数	配布部数				
評定	B	B				
<p>判定理由</p> <p>刊行数：目標を達成した (刊行数1,800部：『日本美術年鑑』(①)600部、『美術研究』(②～④)各400部)。 配布部数：関係機関への配布部数の目標を達成した (配布部数1,740部：『日本美術年鑑』600部、『美術研究』各380部)。</p>						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>定性的にB評価、定量的にもB評価とした。それゆえ総合的評価 (平均値) もB評価とした。</p> <p>年度計画通り、『美術年鑑』1冊と『美術研究』3冊を刊行した。前者においては、2012 (平成24) 年美術界年史、美術展覧会、美術文献目録を収録して、遺漏なく斯界の動向の記録に努めるとともに、後者では、論文、翻訳論文、展覧会評、研究資料のそれぞれにおいて国内外の文化財研究に資するべく充実を図った。</p>

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>中期計画にあげた実施状況は、所期の目的を達成している。</p> <p>次年度は、『日本美術年鑑 平成26年度版』1冊の刊行と、『美術研究』3冊の刊行を目指したい。</p>

業務実績書

研No.62

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行（『無形文化遺産部研究報告』、『無形民俗文化財研究協議会報告書』）（2） －①）		
【事業概要】	無形文化遺産部スタッフによる業績に基づく論考・報告・資料紹介等を内容とする『無形文化遺産研究報告』及び民俗文化財保護行政担当者、無形民俗文化財保存関係者、研究者の参加を得て開催する無形民俗文化財研究協議会の事例報告・総合討議を内容とする『無形民俗文化財研究協議会報告書』を刊行する。		
【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	無形文化遺産部長 飯島満
【スタッフ】	高桑いづみ（無形文化財研究室長）、久保田裕道（無形民俗文化財研究室長）、今石みぎわ（研究員）、菊池理予（研究員）		
【主な成果】	<p>(1) 主として無形文化遺産部研究員の業績に基づく論考・報告・資料紹介等を内容とする『無形文化遺産研究報告』第9号の刊行。</p> <p>(2) 26年12月5日に開催した無形民俗文化財研究協議会での事例報告・総合討議を内容とする『第9回無形民俗文化財研究協議会報告書』の刊行。</p>		
【年度実績概要】	<p>(1) 『無形文化遺産研究報告』第9号を以下の内容で刊行した。</p> <p>「染織技法書に見られる豆汁の役割一寛文6年刊『紺屋茶染口伝書』を中心として」 菊池理予 「無形文化遺産の保護に関する第9回政府間委員会における議論の概要と課題」 二神葉子 「〔資料紹介〕昭和49年撮影『竹富島の種子取り』 —無形文化遺産部収蔵フィルムとそのデジタル化(2)—」 佐野真規 「梅村豊撮影歌舞伎写真(六)」 鎌田紗弓 「フィルモン音帯一覧(2015年3月現在)」 飯島満 「〔資料紹介〕東京文化財研究所所蔵 フランス・パテ社製SPレコード 長唄『吉原雀』を中心に」 星野厚子</p> <p>(2) 「地域アイデンティティと民俗芸能—移住・移転と無形文化遺産—」をテーマとした『第9回無形民俗文化財研究協議会報告書』を以下の内容で刊行した。</p> <p>趣旨説明</p> <p>【第1部 報告】</p> <p>「北海道への移住と民俗芸能」 舟山直治（北海道開拓記念館） 「沖縄の郷友会と民俗芸能」 入澤紀（東京八重山郷友連合会） 「福島県相双地方が培った真宗移民文化 —映画『土徳流離～相双地方復興への悲願』からの報告」 青原さとし（ドキュメンタリー映像作家） 「過疎集落の民俗芸能を継承する —山梨県甲州市塩山「一之瀬高橋の春駒」の事例から」 丸尾依子（山梨県立博物館）</p> <p>【第2部 総合討議】</p> <p>コメント ディスカッション 参考資料（アンケート集計結果・協議会参加者一覧）</p>		
			
	『第9回無形民俗文化財研究協議会報告書』表紙		
【実績値】	刊行数 2部（『無形文化遺産研究報告』第9号、『第9回無形民俗文化財研究協議会報告書』）27年3月		
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 6213

自己点検評価調査

研No.62

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性			
評定	B	B	B			
判定理由 適時性：無形民俗文化財研究協議会で取り上げた住民の移動（自然災害や過疎化等が要因となる場合もある）が及ぼす民俗文化財への影響は、現代日本において検討をしなければならない最も重要な問題の一つと考える。 独創性：『無形文化遺産研究報告』掲載の資料紹介は、東京文化財研究所所蔵資料を中心としたものであるが、いずれもが稀少性の高い資料であり、現時点で当研究所以外での所在を確認できないものが含まれている。 発展性：情報の多様さ豊富さの点で、有用性が高い。						

2. 定量的評価

観点	刊行数					
評定	B					
判定理由 刊行数：予定通りの刊行数を達成している。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	無形文化遺産の報告書として、情報が豊富で質の高い研究報告が掲載されている。関係機関や専門研究者へ配布した後、広範な研究分野からの要請にも資するため、PDFでの公開も予定されている。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	計画通り年間2冊の報告書が刊行されており、目的を順調に達成している。次年度も同様に報告書2冊の刊行を予定している

業務実績書

研No.63

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行(『保存科学』54号)((2)-①)		
【事業概要】 保存修復科学センター・文化遺産国際協力センターで行われた文化財の保存・修復に関する調査・研究成果の公開を目的に、年1回研究論文集『保存科学』を刊行する。様々な文化財の科学的調査結果や基礎研究に関する論文、受託研究に関する研究報告・修復処置報告等を掲載する。また、より一層の研究成果の公開に努めるため、『保存科学』掲載論文PDFファイル化を行い、インターネット上での公開を行う。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター長 岡田健
【スタッフ】 吉田直人(主任研究員)、森井順之(主任研究員)、川野邊渉(文化遺産国際協力センター長)			
【主な成果】 『保存科学』第54号を発行した			
【年度実績概要】 (1)編集委員会 岡田健、川野邊渉、神庭信幸(東京国立博物館学芸研究部保存修復課長)、稲葉政満(東京藝術大学大学院美術研究科教授)の4名からなる編集委員会を編成した。 (2)査読及び編集作業 投稿された21件全ての原稿に対して、査読委員(保存修復科学センター及び文化遺産国際協力センターの正職員、編集委員、及び外部査読者)による査読を実施し、最終的に報文4件、報告14件、計18件の掲載を決定した。 (3)刊行 製本版(版型B5版、口絵カラー11頁、本文総ページ数239頁)を650部発行し、関係諸機関に485部配布した。また、全ての原稿についてPDFファイルを作成し、東京文化財研究所のウェブサイトから自由にダウンロードできるようにした。 掲載された記事のうち、報文4報の題名はそれぞれ下記のとおり 1. 鳥取県・花見瀉墓地赤碓塔に見られるハニカム状風化 2. 増裏打ち作業における古糊と打刷毛の接着効果について 3. 日岡古墳の保存施設内における温熱環境の調査 4. 日光東照宮唐門および透塀の塗装彩色材料に関する調査 他 報告14報			
			
『保存科学』54号表紙			
【実績値】 刊行数 1件 印刷部数 650部 配布部数 485部			
【備考】 『保存科学』54号、27年3月発行			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 6214

自己点検評価調書

研No.63

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：文化財調査・研究に関わる最新の成果を公表している。 独創性：自然科学的方法論に基づいたオリジナリティの高い成果を公表している。 発展性：様々な種類の文化財、およびその材料を対象に、多様なテーマでの成果を公表している。 効率性：編集委員会のもとで速やかかつ確実な編集作業と発行を実現している。 継続性：年度ごとに発行することにより、成果の速やかな公表に寄与している。 正確性：専門家による厳正な査読により科学論文としての高い質を維持している。						

2. 定量的評価

観点	刊行数	印刷部数	配布部数			
評定	B	B	B			
判定理由 刊行数、印刷部数、配布部数：いずれも目標を達成した。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	多様な内容の報文と報告を、厳正な査読を経ることにより、自然科学論文としての水準を担保して公表することができた。部数が限られる製本版だけではなく、PDFとしてインターネット公開することにより、関心を持つあらゆる人々に最新の文化財調査研究に関わる知見にアクセスする機会を保証していることは、当該分野の地位を高めることにも貢献するものである。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、予定通り「保存科学」45号を発行した。次年度は中期計画最終年度にあたることから、各研究プロジェクトの総括的な成果を多く公表する予定である。

業務実績書

研No.64

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行 (2)－①		
【事業概要】			
文化財に関する調査・研究に基づく成果について、定期的な刊行物を発行する。			
【担当部課】	奈良文化財研究所	【プロジェクト責任者】	所長 松村恵司
【スタッフ】			
【主な成果】			
紀要等 2 点、ニュース 2 種 8 点、合計 10 点を刊行した。			
【年度実績概要】			
(紀要等)	『奈良文化財研究所紀要 2014』 2014. 6 月刊、3,000 部 『奈良文化財研究所概要 2014』 2014. 9 月刊、2,700 部		
(ニュース)	『奈文研ニュース No. 53』 2014. 6 月刊、3,000 部 『奈文研ニュース No. 54』 2014. 9 月刊、3,000 部 『奈文研ニュース No. 55』 2014. 12 月刊、3,000 部 『奈文研ニュース No. 56』 2015. 3 月刊、3,000 部 『埋蔵文化財ニュース No. 158－石造文化財の保存研究－』 2015. 3 月刊、2,500 部 『埋蔵文化財ニュース No. 159－埋文センター40周年－』 2015. 3 月刊、2,500 部 『埋蔵文化財ニュース No. 160－埋文センターが保有する機器一覧－』 2015. 3 月刊、2,500 部 『埋蔵文化財ニュース No. 161－2013 年埋蔵文化財関係統計資料－』 2015. 3 月刊、2,200 部		
			
『奈良文化財研究所紀要 2014』、『奈良文化財研究所概要 2014』			
【実績値】			
刊行数：紀要 1 点、概要 1 点、奈文研ニュース 4 点、埋蔵文化財ニュース 4 点、計 4 種 10 点			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 6215

自己点検評価調査

研No.64

1. 定性的評価

観点	適時性	継続性				
評価	B	B				
判定理由 適時性：調査研究の成果を適時に刊行できた。 継続性：継続的な定期刊行物として刊行できた。						

2. 定量的評価

観点	刊行数					
評価	B					
判定理由 刊行数：当初の計画どおりに刊行することができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	定期刊行物は、研究成果を公表するものとして計画的に刊行できた。 また、多様な研究成果、特に継続的な調査研究の成果を専門家だけでなく、一般の方にもわかりやすい形での刊行に努めた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	紀要、概要、ニュースの刊行は、計画どおりに順調に実施できた。 また、中期計画最終年度である次年度においても、調査研究の成果を適時に刊行できるよう努める。

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信
プロジェクト名称	第37回 文化財の保存と修復に関する国際研究集会の報告書作成 ((2)―①)
【事業概要】 昨年度開催した、第37回文化財の保存と修復に関する国際研究集会「「かたち」再考―開かれた語りのために―」の報告書を作成する。	
【担当部課】	企画情報部
【プロジェクト責任者】	主任研究員 皿井 舞
【スタッフ】田中淳（副所長（部長・文化財アーカイブズ研究室長兼務））、山梨絵美子（副部長）、塩谷純（近・現代視覚芸術研究室長）、津田徹英（文化形成研究室長）、小林達朗（主任研究員）、小林公治（広領域研究室長）、二神葉子（情報システム研究室長）	
【主な成果】 前年度の26年1月10日（金）～12日（日）、東京文化財研究所の地下セミナー室において開催した、第37回文化財の保存と修復に関する国際研究集会の報告書を作成した。	
【年度実績概要】 国際研究集会報告書『第37回文化財の保存と修復に関する国際研究集会 「かたち」 再考 開かれた語りのために』を刊行した。目次は次の通り。	
刊行にあたって 皿井舞「趣旨説明「今、なぜ「かたち」なのか」 イケムラレイコ（アーティスト）・田中淳「基調対談 生まれてくる「かたち」」	
セッション1：群れとしての「かたち」 江村知子（文化遺産国際協力センター主任研究員）「セッション趣旨説明―近世日本絵画の人物表現の細部に着目して」 サイモン・ケイナー（セインズベリー日本藝術研究所）「先史時代からみた「かたち」の概念―土偶や縄文時代の遺物の観察を通して」 高桑いづみ（無形文化遺産部無形文化財研究室長）「くり返す」ということ―音楽の「かたち」と変化する伝承―」 ユキオ・リビット（ハーバード大学）「蟠龍図の「かたち」と行為」 小沢朝江（東海大学）「近代日本の行在所にみる様式の創造」 討議― 司会：江村知子、荒川正明（学習院大学）	
セッション2：個としての「かたち」 塩谷純「セッション趣旨説明 狩野芳崖、晩年の山水画から」 小林達朗「美しい術―国宝千手観音像の場合」 内呂博之（金沢21世紀美術館） 「「かたち」への挑戦―岡田三郎助と藤田嗣治」 大島徹也（愛知県美術館）「ポロックをポロックとして見る―ジャクソン・ポロックのオールオーバーのポード絵画」 渡部泰明（東京大学）「歌の「かたち」―源俊頼の方法」 討議二 司会：塩谷純、藤川哲（山口大学）	
セッション3：「かたち」をささえるもの 綿田稔（前企画情報部文化財アーカイブズ研究室長）「セッション趣旨説明 雪舟の「慧可断臂図」を例に」 メラニー・トレーデ（ハイデルベルグ大学）「八幡縁起のローカリゼーション」 崔公鎬（韓国伝統文化大学校）「器―社会的形態・文明の記憶」（翻訳：稲葉真以／韓国光云大学） 塚本鷹充（東京国立博物館）「中国絵画史における「人格」と「かたち」―呉彬「山陰道上図巻」と価値評価の構造」 桑木野幸司（大阪大学） 「記憶のかたち―コスマ・ロッセッリ『人工記憶の宝庫』（1579年）における天国と地獄の表象」 討議三 司会：綿田稔、佐藤直樹（東京芸術大学） 本報告書は、以上に加えて、各発表者の英文レジュメ、サイモン・ケイナー及びメラニー・トレーデ氏の英文フルペーパー、崔公鎬氏の韓文及び英文フルペーパーを掲載。	
 報告書表紙	
【実績値】 報告書刊行数 1点 『文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「かたち」再考―開かれた語りのために―』（東京文化財研究所、26年12月17日、一部市販） 400部	
【備考】	

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 6221

自己点検評価調査

研No.65

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	独創性		
判定	B	B	B	B		
判定理由 適時性：前年度の成果について計画通りに刊行することができた。 発展性：シンポジウムを踏まえて発表時の原稿よりも深い考察を行った論考が集まり、また、校正による著者とのやり取りの中で、さらに内容を深めることができた。 継続性：前年度のシンポジウム成果を継承・吟味することができた。 独創性：前年度のシンポジウムでは学問諸分野をまたぐ「かたち」という枠組みを設定して議論した成果を刊行し広く公開することができた。						

2. 定量的評価

観点	報告書刊行数					
判定	B					
判定理由 報告書刊行数：計画通り報告書を刊行することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	前年度開催した「かたち」再考 ―開かれたかたりのために― シンポジウムの内容を精査し、報告書として刊行することができた。したがって、定性的、定量的ともB評価と考え、総合的にもBと判定した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	定性的にも定量的にも高い水準で実施することができたので、Bと判断した。 また、本報告書刊行を準備するにあたって浮かび上がってきた課題は、次期中期計画を策定するにあたって大いに参考になるものであり、それらの課題をさらに深めるためにも、今後継続して研究会を開催していきたい。

業務実績書

研No.66

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	平成26年度オープンレクチャー((2)-②)		
【事業概要】 企画情報部の美術史研究の成果を一般に公表することを目的とする。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	副所長(部長・文化財アーカイブズ研究室長兼務) 田中淳
【スタッフ】 山梨絵美子(副部長)、二神葉子(情報システム研究室長)、小林公治(広領域研究室長)、津田徹英(文化形成研究室長)、塩谷純(近・現代視覚芸術研究室長)、小林達朗(主任研究員)、皿井舞(主任研究員)、安永拓世(研究員)、中野照男(客員研究員)、三上豊(和光大学教授・客員研究員)、近松鴻二(学習院大学非常勤講師・客員研究員)、吉田千鶴子(東京藝術大学非常勤講師・客員研究員)			
【主な成果】 (1) 第48回企画情報部オープンレクチャー「モノ／イメージとの対話」と題して4講演を2日間にわたり開催した。 (2) 参加者数：163人、アンケートによる満足度：82.7% (回収率：78%) (3) 4講演中の1つは講演内容を踏まえて、次年度『美術研究』に論文として掲載を予定。			
【年度実績概要】 (1) 企画情報部では、研究成果を広く公表するために公開学術講座を毎年秋に開催している。本年はその48回目を迎えた。「モノ／イメージとの対話」を統一テーマに掲げ、金曜日と土曜日の午後、2日間連続で開催した。 第1日目：26年10月31日(金) 午後1:30～4:30 東京文化財研究所地下セミナー室 「一流相承系図(絵系図)の構想と機能」津田徹英 「院政期絵画における二つの美の原理—似絵の成立をめぐる—」伊藤大輔(名古屋大学大学院教授) 第2日目：26年11月1日(土) 午後1:30～4:30 東京文化財研究所地下セミナー室 「仙台・昭忠碑、被災から復興へ向けて」塩谷純・高橋祐二(ブロンズスタジオ) 「戦争の「表象と本物」」河田明久(千葉工業大学教授) (2) 2日間でのべ163人が聴講した。聴講者にアンケートを実施したところ、127人から回答を得た(回収率：78%)。満足度に関する回答結果は、「たいへん満足した」43人、「おおむね満足した」70人、「普通だった」7人、「不満が残った」2人、無回答5人。アンケート回答者の82.7%が満足感を得た。 (3) 4講演のうち「一流相承系図(絵系図)の構想と機能」については、次年度刊行の『美術研究』に講演内容を踏まえて論文として掲載することが『美術研究』編集会議で承認された。			
			
オープンレクチャーの開講(第1日目)			
【実績値】 参加者数 163人 満足度 82.7% (回収率：78%)			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 6222

自己点検評価調査

研No.66

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	独創性	継続性	正確性	
評定	B	B	B	B	B	
判定理由 適時性：東京文化財研究所企画情報部の研究の「今」を一般に公表し、その適時性において成果が認められた。 独創性・発展性：それぞれの研究成果を単に公表するのではなく、「モノ／イメージとの対話」という独自の統一のテーマで括ることで独創性を打ち出しつつ、これまで培われ・蓄積されてきた成果の公表を行い、それぞれに調査・研究への展望を示して、聴講者の満足度をアンケート集計結果から得ることができた。 継続性：企画情報部のオープンレクチャーとして、途切れることなく第48回目の開催を行うことができた。 正確性：講演は、作品に即した実査にもとづく所見に立脚する。その画像資料の提示にあたってパワーポイントの映写機器を更新し、作品のもつクオリティに肉薄するような画像資料を聴講者に提示することで、講演で取り上げた作品が正確に伝わるように心がけた。						

2. 定量的評価

観点	参加者数	満足度				
評定	B	B				
判定理由 参加者数：両日で160人の定員に対して、163人の聴講者を得た。 満足度：聴講者アンケートによる満足度は、集計の結果、8割以上に達した。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	定性的にB評価、定量的にもB評価を得た。総合的評価（平均値）もB評価（3点）とした。次年度も文化財に関する調査・研究に基づく最新の成果・新知見を、時宜に適應しながら公表し、聴講者数、満足度においても目標値を満たすことを目指したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の趣旨に添いつつ、本年度も計画通り「平成26年度オープンレクチャー」を実施し、所期の目的を達成した。五ヵ年計画の最終年である次年度も、文化財に関する調査・研究に基づく最新の成果・新知見を、「モノ／イメージとの対話」という統一テーマで括りつつ、公開講演という形態で成果・知見を一般に公表・還元することを目指す。

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信				
プロジェクト名称	公開講演会、現地説明会等の開催 ((2)-②)				
【事業概要】 文化財に関する調査・研究に基づく成果について、公開講演会、現地説明会等の開催により、積極的に公開・提供する。					
【担当部課】	研究支援推進部 連携推進課、研究支援課	【プロジェクト責任者】	連携推進課長 田中康成 研究支援課長 今西泰益		
【スタッフ】 松本正典(連携推進課課長補佐)、車井俊也(連携推進課課長補佐)、米野元則(連携推進課専門職員)、江川正(宮跡等活用支援係長)、三本松俊徳(宮跡等活用支援係係員)					
【主な成果】 (1) 公開講演会は、例年実施している定例公開講演会(奈良)を2回、特別講演会(東京)を1回、飛鳥資料館特別展記念講演会等を2回開催した。いずれも多く参加者があり、日頃の当研究所研究成果を一般に発信ができた。 (2) 発掘調査に伴う現地説明会等を2回実施した。このことにより、調査研究成果を適時に適切に国民に公開・公表することができ、事業としては順調に実施できた。					
【年度実績概要】					
(1) 公開講演会等		 <p>第114回公開講演会風景</p>			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 第114回公開講演会 26年6月28日(土) 聴講者数236人 場所：平城宮跡資料館講堂 講演者数3名 アンケート結果＝回収数160人 回収率67.8% 満足度A=134人(83.8%)/B=25人(15.6%)/C=1人(0.6%) ・ 第115回公開講演会 26年10月4日(土) 聴講者数210人 場所：平城宮跡資料館講堂 講演者数3名 アンケート結果＝回収数129人 回収率61.4% 満足度A=113人(87.6%)/B=16人(12.4%)/C=0人(0.0%) ・ 特別講演会(東京) 26年10月25日(土) 聴講者数480人 場所：有楽町朝日ホール 講演者数6名 アンケート結果＝回収数240人 回収率50.0% 満足度A=213人(88.8%)/B=25人(10.4%)/C=2人(0.8%) ・ 飛鳥資料館春期特別展「いにしへの匠たちーものづくりからみた飛鳥時代ー」記念座談会 26年5月11日(日) 参加者数51人 場所：飛鳥資料館講堂 講演者数1名 アンケート結果＝回収数31人 回収率60.8% 満足度A=31人(100.0%)/B=0人(0.0%)/C=0人(0.0%) ・ 飛鳥資料館秋期特別展「はぎとり・きりとり・かたどりー大地にきざまれた記憶ー」記念講演会 26年11月1日(土) 参加者数40人 場所：飛鳥資料館講堂 講演者数1名 アンケート結果＝回収数32人 回収率80.0% 満足度A=32人(100.0%)/B=0人(0.0%)/C=0人(0.0%) 					
(2) 現地説明会等				 <p>飛鳥藤原第182次(藤原宮大極殿院)発掘調査 現地説明会風景</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 飛鳥藤原第182次(藤原宮大極殿院)発掘調査1,450㎡ 現地説明会 26年11月8日(土) 参加者数794人 報告者1人 アンケート結果＝回収数172人 回収率21.7% 満足度A=111人(64.5%)/B=61人(35.5%)/C=0人(0.0%) ・ 飛鳥藤原第183次(藤原宮東方官衙北地区)発掘調査973㎡ 現地見学会 26年12月14日(土) 参加者数622人 報告者1人 アンケート結果＝回収数89人 回収率14.3% 満足度A=56人(62.9%)/B=31人(34.8%)/C=2人(2.3%) 					
【実績値】					
開催回数 7回					
(1) 公開講演会等開催回数 5回					
(2) 現地説明会等開催回数 2回					
(参考値)					
(1) 公開講演会等					
聴講者延人数1,017人 アンケート回収数592人 回収率58.2% 満足度A=523人(88.3%)/B=66人(11.1%)/C=3人(0.5%)					
(2) 現地説明会等					
参加者延人数1,416人 内アンケート実施回収数2回 回収数261人 回収率18.4% 満足度A=167人(64.0%)/B=92人(35.2%)/C=2人(0.8%)					
【備考】					

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 6223

自己点検評価調査

研No.67

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
評定	B	B	B	B	B	
判定理由 適時性：発掘調査成果など広く一般に公開し、その必要性に答えることができた。 独創性：公開は、当研究所の調査・研究内容の新規性及び卓越性を持たせ実施することができた。 発展性：聴講者、参加者は、多数かつ多種にわたり様々な分野への影響が期待される。 継続性：様々な媒体を活用して、調査・研究成果の継続的な公表を行った。 正確性：アンケート結果に見られるように多数が満足する正確性を持った内容であった。						

2. 定量的評価

観点	開催回数					
評定	B					
判定理由 開催回数：公開講演会、現地説明会等ともに予定どおり実施できた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	公開講演会については5回実施、現地説明会等については2回実施し、いずれも多数の参加者があった。これらの参加者に対して行ったアンケートでは、公開講演会では99.5%、現地説明会等では99.2%の方から「大変満足である」または「おおむね満足である」という結果をもってBと評価する。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	公開講演会、現地説明会等の開催は計画どおり所期の目標を達している。 今後も、調査研究の成果に基づく講演、現地説明会等の内容及び配付資料の充実、アンケート調査による参加者ニーズの把握を図る。さらに事業広報を充実させることにより参加者数の増加と満足度の向上を図る。最終年度となる27年度に向けて、講演会の講演者やその内容をさらに検討することにより、参加者のニーズの期待を高められるように努める。

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	ウェブサイトの運用((2)ー③)		
【事業概要】 研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトの充実を図る。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	情報システム研究室長 二神葉子
【スタッフ】 田中淳(副所長(部長・文化財アーカイブズ研究室長兼務))、山梨絵美子(副部長)、津田徹英(文化形成研究室長、塩谷純(近・現代視覚芸術研究室長)、小林公治(広領域研究室長)、小林達朗(主任研究員)、皿井舞(主任研究員)、安永拓世(研究員)、城野誠治(専門職員)、橘川英規(アソシエイトフェロー)、福永八朗(アソシエイトフェロー)、小山田智寛(研究補佐員)、高橋佑太(研究補佐員) 広報委員(情報システム部会): 川野邊渉(文化遺産国際協力センター長) 各部門情報システム部会員:高砂健介(前研究支援推進部管理室長)、平出秀文(研究支援推進部管理室長)、津田徹英、飯島満(無形文化遺産部長)、吉田直人(保存修復科学センター主任研究員)、加藤雅人(文化遺産国際協力センター国際情報研究室長)			
【主な成果】 (1) 活動報告(和英)や研究会等の開催情報などの広報について、及び文化財アーカイブズ研究室と連携しての文献や写真などの所蔵資料、研究成果の発信についてその手法の検討を行った。 (2) 黒田清輝関連のページを中心としたウェブサイトの更新を随時実施し、レイアウトやメニュー構成などデータへのアクセス方法を改善した。また、WordPressによるデータベースを昨年度に引き続き随時整備・公開した。さらに、それらの更新情報をソーシャルネットワークサービス(SNS)により発信した。 (3) データベースの整備・公開により、調査研究情報へのアクセスが容易となった。			
【年度実績概要】 (1) ・広報の手法、所蔵資料や研究成果の情報の発信手法の検討は、情報システム研究室及び文化財アーカイブズ研究室を中心に随時行った。 ・特に、奈良国立博物館との共同研究の一環として撮影されてきた、仏画を中心とした文化財の高精細画像の蓄積・共有の方法に関して、奈良国立博物館との協議を26年5月28日に行った。 (2) ・黒田記念館の再オープンにあわせ、26年12月までにウェブサイトの黒田清輝関連のページを全面的に更新した。従来も公開していた「黒田清輝日記」の一部について、WordPressのブログ機能を応用することで年月日や本文の記述の検索ができるようになった。 ・WordPressによるデータベースでは、「ガラス乾板データベース」「新海竹太郎関連ガラス乾板」「尾高鮮之助調査撮影記録」「和田新調査撮影記録」「日本美術年鑑所載物故者記事」「日本美術年鑑所載美術界年史彙報」「年記資料集成」を公開した。東京文化財研究所設立初期の職員である尾高鮮之助、和田新撮影の画像は約80年前に撮影されたもので、東南アジア・南アジア・西アジアの遺跡の当時の状況についての知見を得ることができた。 ・上記のアーカイブ・データベースは、所蔵資料などを含めた総合検索システムと連携することで、横断検索を可能とした。このことで、関連する事象を各種の資料から一度に抽出することが可能となり、調査の効率が改善された。 ・Facebook及びTwitterによるウェブサイトの更新情報の発信を開始し、英語と日本語による国内外の文化財関係者への情報発信を実施できるようになった。 (3) ・物故者記事、美術界年史彙報など、従来は検索できなかった情報が横断検索できるようになったことで、専門家同士の交流などの動向を知ることができるようになった。 ・たとえば、アフガニスタン・バーミヤーンの大仏は2001年に爆破され、現在は世界遺産一覧表記載の文化遺産として整備が行われているが、その手法には問題も指摘されている。ユネスコ・世界遺産センターなどへの整備手法に対する提言が東京文化財研究所を中心とした専門家により26年6月に行われたが、その検討にあたって、尾高鮮之助撮影のバーミヤーンの大仏の画像を利用し、復元された足状構造物の不適切性について指摘することが可能となった。国際的な課題となっている文化遺産の復元の問題について提言を行うにあたり、データベース化された画像を活用することが可能になった事例といえる。			
【実績値】 奈良国立博物館との協議 1回 データベース公開数(外部) 7件(備考欄①～⑦) (参考値) ウェブサイトアクセス件数 1,603,086件			
【備考】 ①「ガラス乾板データベース」 ②「新海竹太郎関連ガラス乾板」 ③「尾高鮮之助調査撮影記録」 ④「和田新調査撮影記録」 ⑤「日本美術年鑑所載物故者記事」 ⑥「日本美術年鑑所載美術界年史彙報」 ⑦「年記資料集成」			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 6231

自己点検評価調査

研No.68

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：ウェブサイトによる情報公開は現在必須であり、海外への発信力も求められている。そのような需要に対し、時宜を得て対処することができた。 独創性：Wordpressによる研究情報のデータベースには新規性があり、その活用が独創的であるといえる。また、東京文化財研究所が所蔵する一次資料は他にないものである。 発展性：Wordpressによる研究情報のデータベースはテキストも画像も扱うことが可能なため、これからもさまざまな種類のデータを検索可能な形で公開することができる。 効率性：ウェブサイトの大きな変更は外部委託しているが、週2回程度来所して所員と協議しながら作業を実施し、結果的に短時間で目的に適合したウェブサイトを構築できている。データベース構築では外部委託は最小限にとどめ、ほとんどは職員が対応することで費用対効果が向上している。 継続性：ウェブサイトの更新は複数の職員があたっているが、その日ごとの作業の進捗状況について書面で情報共有することで継続的なデータ更新作業を行うことができている。 正確性：データの公開に当たっては、事前に所内限定で公開したうえで複数の職員により内容を確認し、精査したうえで外部公開を行っている。						

2. 定量的評価

観点	データベース公開数				
評定	B				
判定理由 データベース公開数：年度計画で挙げていたデータベースについて公開することができたため。					

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	ウェブサイトの運用については、適時性、効率性、継続性、独創性、発展性、正確性が認められた。また、Wordpressによるデータベースに関しては、テキスト・画像によるデータベースを横断検索可能な形で7件公開することができた。したがって、実績の総合評価も十分な成果が認められると結論した。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	ウェブサイトの情報へのアクセスの利便性向上、データの充実、速やかな更新を実施することができた。ウェブサイトのアクセス件数も増加している。このような実績から、当年度における中期計画の実施状況は順調であると考えた。次年度以降も多くのデータベースの公開など、当研究所の広報・研究成果の公開をより効果的に実施するための業務を実施していくとともに、高精細画像の共有のための仕組みについて引き続き研究を実施していきたい。

業務実績書

研No.69

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	ウェブサイトの充実 ((2)-③)		
【事業概要】研究所の事業・研究成果をはじめ、催し物案内など様々な広報を実施する。新たな情報発信をすべく更なる内容の検討を行う。			
【担当部課】	研究支援推進部連携推進課	【プロジェクト責任者】	連携推進課長 田中 康成
【スタッフ】 渡 勝弥(文化財情報係長)、高田祐一(文化財情報係アソシエイトフェロー)、永岡 美和(文化財情報係事務補佐員)、鈴木 歩(文化財情報係事務補佐員)			
【主な成果】 (1) アクセス解析の精査による利用増加施策を戦略的に立案した。 (2) リポジトリコンテンツ増加により利用者数の増加が見られた。 (3) コラムの継続発信とブログの活用促進を行った。 (4) ウェブサイトの多言語化対応ページの充実を行った。 (5) ウェブサイト内コンテンツの再配置を行った。			
【年度実績概要】 (1) 25年度に設置したアクセス解析システムにより、蓄積されたページ単位の利用データを分析し、利用者の状況をきめ細かく把握することで各種施策の基礎情報とした。 (2) 学術情報リポジトリのコンテンツを増加した。コンテンツ増加に伴い、利用者が増加した。 (3) 研究員によるコラム「作寶樓」と「探検! 奈文研」を定期的にリリースした。催し物等の情報をタイムリーに発信することで、ブログ利用者が増加した。 (4) 昨年度に引き続きウェブサイトの多言語化を進め、今年度は弊所刊行物の英語サマリーや英語目次をテキスト入力し、ウェブサイトで公開した。196冊の刊行物をテキスト入力し、約200万字を公開した。 (5) ウェブサイト内のコンテンツをアクセス解析の結果をもとに再配置した。その結果、閲覧が少なかったコンテンツがよく閲覧されるようになり、ページビュー数が劇的に向上した。			
			
<p>ブログ利用者の増加が見られた 探検! 奈文研のページ</p>			
【実績値】 (参考値) ウェブサイトアクセス件数：525,886件 学術情報リポジトリ：アクセス数前年度比211%増加（2013年度：14,410件、2014年度：39,379件） 刊行物の英語サマリーと英語目次の公開：冊数196冊、文字数約200万字 ウェブサイトページビュー：ページビュー数前年度比455%増加（2012年度：2,177,206件、2013年度：2,035,788件、2014年度：9,523,837件）			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 6232

自己点検評価調査

研No.69

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：ブログの活用を促進したことにより、適切な時期に適切なタイムリーな情報発信を実践した。 独創性：研究所の学術成果を公開する学術情報リポジトリのコンテンツが増加した。 発展性：多言語化対応によりグローバルな情報発信が可能となった。 効率性：アクセス解析システムのデータを分析することにより、効率よく各種施策の立案・事後評価が可能となった。 継続性：コンテンツの継続的な配信により閲覧者の定着を確認できた。 正確性：事業内容、活動状況等の適時公開を行った。						

2. 定量的評価

観点						
評定						
判定理由						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	情報発信の国際化、学術情報の成果発信、最新情報の発信、アクセス解析システムの確立を適切に推進した。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	2010年以來、下降気味だったウェブサイトのアクセス数が、ウェブサイト内のコンテンツ増加、再配置及び多言語化対応を行ったことにより、アクセス数を大幅に増やすことができたため、B判定とした。 次年度以降においてもウェブサイト内のコンテンツ増強を予定しているため、更なるアクセス数の増加が見込まれるものと予想する。

業務実績書

研No.70

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及調査研究成果の発信
プロジェクト名称	平城宮跡資料館における展示公開 ((3)-①)
【事業概要】平城宮跡に関する理解促進、ならびに当研究所が行なう平城宮・京の発掘調査及び研究の成果公開や情報発信のため、平城宮跡資料館において常設展・企画展を実施する。	
【担当部課】	企画調整部
【プロジェクト責任者】	企画調整部長 杉山洋
【スタッフ】加藤真二(展示企画室長)、中川あや(展示企画室研究員)、渡邊淳子(前展示企画室アソシエイトフェロー)、中村 玲(展示企画室アソシエイトフェロー)、松本正典(連携推進課課長補佐)	
【主な成果】	
<p>(1) 常設展の円滑な実施のため、その維持・管理に努めるとともに、高精細画像鑑賞システムを新規設置した。</p> <p>(2) 夏期企画展「平城京ビックリはくらんかい」を開催した。</p> <p>(3) 秋期特別展「地下の正倉院展－木簡を科学する－/埋蔵文化財センターの40年」を開催した。</p> <p>(4) ミニ展示「発掘速報展平城2014」を2期へ分けて開催した。</p>	
【年度実績概要】	
<p>(1) 常設展のみの開館日：124日</p> <p>本年度は、常設展示室に高精細画像鑑賞システム「名画ナビゲーション」を新規設置した。本年度の企画展・特別展に出品した一部の遺物の高精細写真を取り込み、企画展・特別展終了後も、来館者が過去の出品遺物の写真を自由に拡大して観覧することができるようになった。</p>	
<p>(2) 開催期間：26年7月12日～9月21日</p> <p>55年間に及ぶ平城宮跡の発掘調査で出土した様々な遺物や遺構の中から、一番大きいものや一番多いものなど、卓越した特徴をもつものを集めた子供向けの展示を行なった。関連イベントとして、ギャラリートーク「ビックリ先生のじまん話」、親子ワークショップを開催した。</p>	
<p>(3) 開催期間：26年10月18日～11月30日</p> <p>本年で8回目となる年に一度の木簡の実物展覧会で、本年は「木簡を科学する」というテーマに基づいて展示を行なった。木簡の樹種や木取り、保存処理の方法、木製品や考古遺物としての特質などに焦点を当て、木簡研究の最新の成果を紹介した。あわせて、埋蔵文化財センター設立40周年を記念し、当センターのこれまでの歩みや各研究室の最新の研究成果などを写真パネルにて展示した。</p>	
<p>(4) 開催期間：26年12月6日～27年2月1日（Ⅰ期）、27年2月14日～3月31日（Ⅱ期）</p> <p>前年度は春期企画展として開催した平城地区の発掘速報展を、成果を展示として公開しやすい時期の選択と、企画展示室の開室期間の拡大のため、本年度より冬期に開催した。展示企画室半分のスペースを使用し、会期を2期に分けるミニ展示とし、Ⅰ期、Ⅱ期それぞれ主要2遺跡の調査成果について、出土品や調査写真を元に紹介した。</p>	
<p>(5) 前年度の展示についての研究成果を『奈良文化財研究所紀要』などで論文公表した。</p>	
<p>(6) 全国の博物館等展示施設企画展へ出土品の貸出業務、外部からの問い合わせ対応を行った。</p>	
【実績値】	
<p>平城宮跡資料館 26年度 入館者数 109,188名（目標値：83,500名）、開館日数 309日。 特別展開催数 1回（目標値年1回）、企画展等開催数 2回（目標値年1回）</p> <p>（参考値）</p> <p>(1) 常設展のみ 124日、入館者 52,221名</p> <p>(2) 会期 72日、展示品 85件、入館者 17,712名、ギャラリートーク 5回（参加者計 145名）、親子ワークショップ 1回（参加者 35名）、リーフレット 1部 ①</p> <p>(3) 会期 39日、展示木簡 78点（3期に分けて各期 26点）、埋蔵文化財センターの40年展示パネル 11点、入館者 19,281名、ギャラリートーク 3回（参加者計 124名）、リーフレット 1部 ②</p> <p>(4) Ⅰ期会期 45日、展示品 51件、Ⅱ期会期 45日、展示品 76件、入館者計 19,974名、リーフレット 2部 ③</p> <p>(5) 論文数：2件④、(6) 貸出件数 17件、問い合わせ件数 32件</p>	
【備考】	
<p>①『平城京ビックリはくらんかい』2014.7.12、フルカラー16頁、5,000部刊行。</p> <p>②『地下の正倉院展－木簡を科学する－』2014.10.18、フルカラー16頁、7,000部刊行。</p> <p>③『ミニ展示発掘速報展平城2014Ⅰ期』2014.12.6、フルカラー4頁、1,500部刊行。 『ミニ展示発掘速報展平城2014Ⅱ期』2015.2.14、フルカラー4頁、1,500部刊行。</p> <p>④中川あや・渡邊淳子「平城宮跡資料館夏期企画展における新たな試み」『奈良文化財研究所紀要2014』2014.6 中川あや「出土品をアートとして眺め・楽しむ試み」『歴博』No.185 国立歴史民俗博物館2014.7</p>	



夏期企画展 展示室内風景

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 6311

自己点検評価調査

研No.70

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	A	B	B
判定理由 適時性：夏期企画展では、平城地区の本格的発掘調査 55 年の節目となる年に、それまでの調査を振り返って卓越した成果を取り上げ、秋期特別展では、埋蔵文化財センター創立 40 周年を記念して、考古科学分野での最新の研究成果を紹介し、さらに考古科学分野を意識したテーマで地下の正倉院展を行なうなど、本年度にふさわしい展示が実施できたといえる。 独創性：夏期企画展では、一般の歴史系展示施設で行なわれる考古学的な見地からではなく、子供が理解しやすい「一番ビックリするもの」という端的な視点にもとづく展示を実施した。また、秋期特別展では、木簡に書かれた文字ではなく、木製品や考古遺物としての側面に焦点を当てたことも従来の木簡展示にはみられなかった新規の視点といえる。 発展性：平城宮跡資料館の従来の企画展・特別展に比して小規模なミニ展示の開催は初の試みで、予算や準備時間を小規模に抑えつつ、来館者には変化のある資料館展示を印象づけることができるため、今後、ミニ展示という枠で様々な展示が行ないやすくなるという点で応用性が期待できる。 効率性：ミニ展示を、通常は常設展しか見られない冬期（12月～3月）に開催したことで、年間を通じた企画展示室での企画展・特別展開催期間を大幅に拡大することができた。 継続性：夏期企画展は前年度好評であった子供向け展示を本年度も開催した。秋期特別展の地下の正倉院展は年間を通じて最も来館者が獲得できる、平城宮跡ならではの人気の高い展示であり、本年度で8回目の開催となる。いずれの展覧会も、前年度以前とコンテンツは全く変えて、来館者の満足度を高める努力をしている。また、常設展示については、来館者と直接的に接するボランティアガイドの質問票への解答を行い（本年度 25 件）、常設展示のわかりやすさを向上させる努力を払い続けている。 正確性：企画展・特別展ともに、出土品を管理、研究する都城発掘調査部の協力の下に行なっており、展示構成立案段階、リーフレット入稿前に都城発掘調査部員に入念に内容確認してもらうことで、学術的正確性を担保している。						

2. 定量的評価

観点	入館者数	開館日数	特別展開催数	企画展等開催数		
評定	A	B	B	A		
判定理由 入館者数：目標値 83,500 名に対して、実際の入館者数 109,188 名（達成率 131%） 公開日数：定期休館日を除けば例年同様、毎日開館した。 特別展開催数：目標値 1 回を達成した（達成率 100%）。 企画展等開催数：新規で行ったミニ展示（1 回）を含む、目標値 1 回に対し 2 回達成した（達成率 200%）。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	定性的評価、定量的評価、いずれの観点からも、当初の目標を達成し、十分な成果を上げることができた。特に、従来は常設展のみの期間におけるミニ展示の開催が本年度初の試みとして評価できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	平成 22 年のリニューアルオープン以降、地下の正倉院展、発掘速報展を連続的に実施しており、本年度も充実した内容の展示を行った。また、前年度以来、子供向け展示の開催が定着しつつある。開催数の達成はもちろん、平城宮跡にかかわる多彩なコンテンツを、様々な層の来館者に楽しんでもらえる様な展示内容を提供できたという点で、量のみならず質的にも所期の目標を十分に達成していると判断する。最終年度となる 27 年度は、引き続き充実した展示活動を行って来館者の獲得につなげ、リニューアル後の 5 年間の締めくくりとしたい。

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	飛鳥資料館における展示公開(③-②)		
【事業概要】			
飛鳥資料館第1、第2展示室の常設展示の維持管理を行うとともに、展示の手直しを適宜行う。特別展を春秋の2回開催するとともに企画展、講演会を開催する。			
【担当部課】	飛鳥資料館	【プロジェクト責任者】	学芸室長 石橋茂登
【スタッフ】			
西田紀子(学芸室研究員)、丹羽崇史(学芸室研究員)			
【主な成果】			
<p>(1) 常設展示室の展示内容を部分的に改装、映像コーナーの映像を入れ替えた。</p> <p>(2) 春期特別展「いにしへの匠たちーものづくりからみた飛鳥時代ー」を26年4月25日～6月15日に開催し、記念座談会を26年5月11日に開催した。ギャラリートークを3回(26年4月26日、5月11日、5月24日)実施した。</p> <p>(3) 夏期企画展「第5回写真コンテスト「飛鳥の薨」応募作品展」を26年7月25日～9月7日に開催し、写真教室を26年7月25日、8月23日に開催した。</p> <p>(4) 明日香村活性化事業「飛鳥光の回廊」に参加した。26年9月13日～14日開催。</p> <p>(5) 企画展「津田洋 大和の美仏に魅せられて」を26年9月12日～9月28日に開催した。</p> <p>(6) 秋期特別展「はぎとり・きりとり・かたどりー大地にきざまれた記憶ー」を26年10月10日～11月30日に開催し、記念講演会を26年11月1日に開催した。ギャラリートークを4回(26年10月10日、11月22日に2回ずつ)実施した。</p> <p>(7) 冬期企画展「飛鳥の考古学2014- 縄文・弥生・古墳から飛鳥へ -」を27年1月16日～3月1日に開催。ギャラリートークを4回(27年1月17日、2月15日に2回ずつ)実施。</p>			
【年度実績概要】			
<p>(1) 第1展示室、第2展示室、特別陳列室の展示品を部分的に変更した。映像コーナーはソフトを入れ替え、奥飛鳥の文化的景観の新作映像と、既存映像をハイビジョン化した3本を導入した。</p> <p>(2) 飛鳥時代の様々な手工業生産技術に焦点をあて、古代の匠と再現品を作成した現代の匠を対比させた。脇田宗孝氏、小泉武寛氏と、当研究所の松村恵司、玉田芳英の4名による記念座談会「いにしへの技術を語る-現代の「匠」と考古学者-」を実施した。</p> <p>(3) 「飛鳥の薨」をテーマに募集した作品を展示し、優秀作品を選出した。写真教室「①写真のパソコン仕上げ術」「②デジタルプリントテクニック」を開催した。当研究所が撮影した薨のある民家を紹介した「飛鳥の薨マップ」を作成した。</p> <p>(4) 明日香村活性化事業の夜間照明イベントに参加し、前庭にろうそく約3,500本を並べて演出し、夜間無料開館した。</p> <p>(5) イラストレーター津田洋氏による大和の仏像画を展示した。</p> <p>(6) 当研究所の埋蔵文化財センター設立40周年を記念し、遺構を現地以外で保存・公開できるよう資料化する技術に焦点をあて、土層や遺構の剥ぎ取り(土層転写)または切り取りによる実物資料、型取りによるレプリカなどを紹介した。記念講演会として澤田正昭氏「もうひとつの遺跡保存ー土層転写と遺構切り取りー」を開催した。</p> <p>(7) 飛鳥時代の宮殿・寺院のイメージが強い飛鳥にも縄文時代・弥生時代・古墳時代の遺跡が多数あることに焦点をあて、近年の発掘調査成果を中心に紹介するとともに、25年度の飛鳥地域の発掘成果を展示した。奈良県立橿原考古学研究所、明日香村と共催。</p>			
			<p>(6) 秋期特別展 ギャラリートーク</p>
【実績値】			
<p>飛鳥資料館 26年度来館者数38,096名(目標値:48,800名)。特別展開催2回(目標値:年2回)、企画展等開催3回(目標値:年1回以上)、講演会等開催13回(座談会1回、講演会1回、ギャラリートーク11回)、図録類刊行4冊。</p> <p>(2) 会期52日間。来館者数10,597人。陳列件数145件。座談会参加者51人。ギャラリートーク3回。図録1冊(①)</p> <p>(3) 会期39日間。来館者数3,505人。応募・陳列件数213点。写真教室参加者計25人。リーフレット1冊(②)。</p> <p>(4) 会期2日間。来館者数865人(昼間383人、夜間482人)。</p> <p>(5) 会期15日間。来館者数2,716人。陳列件数20点。カタログ1冊(③)。</p> <p>(6) 会期52日間。来館者数9,592人。陳列件数66件。講演会参加者40人。ギャラリートーク4回。図録1冊(④)。</p> <p>(7) 会期39日間。来館者数2,658人。陳列件数313点。ギャラリートーク4回。カタログ1冊(③)。</p>			
【備考】			
<p>①飛鳥資料館研究図録第60冊『いにしへの匠たちーものづくりからみた飛鳥時代ー』2014.4. 1,600部刊行。</p> <p>②リーフレット「飛鳥の薨マップ」2014.7. 10,000部刊行。</p> <p>③飛鳥資料館カタログ第31冊『大和の美仏に魅せられて』2014.9. 1,600部刊行。</p> <p>④飛鳥資料館図録第61冊『はぎとり・きりとり・かたどりー大地にきざまれた記憶ー』2014.10. 1,600部刊行。</p> <p>⑤飛鳥資料館カタログ第32冊『飛鳥の考古学2014』2015.1. 1,600部刊行。</p>			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 6321

自己点検評価調査

研No.71

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
<p>判定理由</p> <p>適時性：(6) 秋期特別展は埋蔵文化財センター40周年の節目をとらえ、一般に紹介されることが少ない遺構の剥ぎ取りなどの保存科学的技術を紹介し、学会の第一人者の講演会を実施できた。</p> <p>独創性：(3) 夏期企画展「飛鳥の甕」は一般から写真を募集する参加型の企画で、古民家の瓦屋根にテーマを限定した点が建築や景観を研究している当研究所にふさわしく、他の写真コンテストと一線を画する。(6) 秋期特別展は土層剥ぎ取り技術を開発した当研究所の歴史を最大に活かしている。</p> <p>発展性：(3) 夏期企画展は写真コンテストと連動した企画で、文化財や歴史に関心のある方々と写真に関心のある方々の双方にアプローチできる企画である。(7) 冬期企画展「飛鳥の考古学」は周辺の他機関と連携した企画で、飛鳥地域の発掘調査成果をもとにさまざまな切り口で紹介するものである。毎年新発見が続く飛鳥において学術的成果の還元と、地域住民に文化財保護と調査研究の最新情報を知っていただく場としても重要である。</p> <p>効率性：3名の学芸室研究員で6つの企画を滞りなく実施することができた。</p> <p>継続性：(3) 夏期企画展の写真コンテストは第5回となり、好評につき今後も継続する予定である。(7) 冬期企画展「飛鳥の考古学」は18年度から継続して実施しており、周辺自治体の文化財関連部門との連携を続けている。</p> <p>正確性：各展覧会では実物資料を中心に展示し、資料の真正性を確保した。(5) 企画展「津田洋 大和の美仏に魅せられて」では作者の津田氏にポスターデザインから会場での陳列方法まで直接意見交換をして、作家の意図を正確に表現した。</p>						

2. 定量的評価

観点	来館者数	特別展開催数	企画展等開催数	講演会等開催数	図録類刊行数
評定	D	B	A	A	A
<p>判定理由</p> <p>来館者数：来館者数は目標値の78%で目標値を下回った。</p> <p>特別展開催数：目標値(年2回)を達成した。</p> <p>企画展等開催数：企画展開催目標値(年1回以上)の120%以上(3回開催)を達成した。</p> <p>講演会等開催数：目標(年2回)に対し13回開催した。</p> <p>図録類刊行数：目標(年2冊以上)に対し4冊刊行した。</p>					

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>来館者数は飛鳥全体の観光客が減少するなかで当館も伸び悩んでおり、増加のための工夫が求められる。</p> <p>展覧会は特別展2回、企画展3回を開催して、来館者を飽きさせない努力をしている。講演会やギャラリートークも精力的に開催している。写真コンテストと写真教室のように参加型の企画を設定し、当館の活動への積極的関与も工夫している。展覧会の内容は当研究所あるいは飛鳥という歴史的な地域の特性を活かした内容となっており、3名の学芸室研究員で複数回の展覧会を実施するために効率的な運営にも努力している。総合的評価としてはBといえる。</p>

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>特別展などによる当研究所の調査研究成果の公表、地方公共団体や他機関との連携・協力体制の構築については順調と判定できる。入館者数は課題だが、交通アクセスの不便さをたびたび指摘されているところであり、交通インフラ整備や広い駐車場確保など、容易に解決しがたい問題も多い。展覧会の内容は当研究所の展示施設として適切な質を維持しており、今後は参加型の企画も増やしつつ、最新の学術成果をわかりやすく伝えるよう努力していきたい。</p>

業務実績書

研No.72

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	藤原宮跡資料室における展示公開(3)－③)		
【事業概要】 都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区) 庁舎に併設された藤原宮跡資料室及びエントランスにおいて、常設展示、発掘調査成果の速報展示などを実施し、展示公開の充実を図る。			
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
【スタッフ】 清野孝之(考古第三研究室長)、降幡順子、山本 崇、森川 実、廣瀬 覚(以上、都城発掘調査部主任研究員)、和田一之輔、諫早直人(以上、考古第一研究室研究員)、若杉智宏、大澤正吾(以上、考古第二研究室研究員)、森先一貴(考古第三研究室研究員)、大林 潤(遺構研究室研究員)、桑田訓也(史料研究室研究員)、大谷育恵(考古第一研究室アソシエイトフェロー)、金宇大(考古第二研究室アソシエイトフェロー)、南部裕樹(考古第三研究室アソシエイトフェロー)、井上直夫(写真室再雇用職員)、栗山雅夫(写真室技術職員)			
【主な成果】 常設展示及び発掘調査成果の速報展示などを通年で実施し、展示公開の充実を図った。庁舎エントランスの速報展示コーナーでは、最新の調査研究成果の公開を実施した。その他、適宜展示解説や各地の博物館への文化財貸与を行った。			
【年度実績概要】 ・都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区) 庁舎に併設された藤原宮跡資料室において、通年にわたり常設展示を実施した。 ・庁舎エントランスに設置した発掘調査成果の速報展示コーナーにおいては、夏季速報展として甘樫丘東麓遺跡の出土遺物と、藤原宮朝堂院地区の出土遺物の展示を行った。また、25年度から行っている「東日本大震災復興調査における奈文研の取り組み」のパネル展示を行った。 ・24年度から行っている橿原市の解説ボランティアによる土日開館を行った。 ・各地の博物館等の要請に応じ、当調査部保管遺物ならびに模型・模造品などの貸与を行った			
			
庁舎エントランスにおける速報展展示			
【実績値】 入室者数：8,461名(目標値4,509名)、開室日数：356日 (参考値) 他機関への所蔵品貸出：18件319点			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 6331

自己点検評価調査

研No.72

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：調査研究成果を常設展示と速報展示などにより公開し、社会からの多様な要望に対応した。 独創性：調査機関ならではの豊富な実物展示、発掘調査に関連した展示に独創性がある。 発展性：調査研究の進展に合わせ、展示内容を発展・更新させた。 効率性：最新の調査研究成果が得られてから、その公開を短期間のうちに効率的に行った。 継続性：常設展示及び速報展示を通年で公開し、研究の進展にあわせて継続的に内容を更新している。 正確性：調査研究の従来の蓄積と最新の成果をわかりやすく、正確な内容で展示公開した。						

2. 定量的評価

観点	入室者数	開室日数				
評価	A	B				
判定理由 入室者数：展示の更新や工夫を行い、目標値 4,509 人を上回った。 開室日数：計画通り土日開室を継続し、年末年始を除き、毎日開館した						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	昨年度に引き続き速報展示を随時変更するなどし、調査成果の速報性を維持している。また、昨年度に引き続き土日開館の実施により、入室者数及び開館日数を維持し、調査研究成果の公表に貢献した。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の4年目にあたる26年度は、土日開館を継続し、常設展示及び速報展示なども充実した内容で継続的に実施し、最終年度の27年度に向けて着実な成果を上げているためBと判断した。

業務実績書

研No.73

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	文化庁平城宮跡管理事務所の運営への協力 ((4)-①)		
【事業概要】 文化庁平城宮跡管理事務所が行う文化庁施設の公開・活用等における連携協力、文化庁の各種行事、発掘調査等の連絡調整及び文化庁施設の維持管理及び修繕等に対して提案、助言、連絡調整等協力する。			
【担当部課】	研究支援課	【プロジェクト責任者】	研究支援課長 今西康益
【スタッフ】 江川 正(宮跡等活用支援係長)、三本松俊徳(宮跡等活用支援係係員)			
【主な成果】 (1)文化庁平城宮跡管理事務所が行う文化庁施設の公開・活用等における連携協力、文化庁の各種行事、発掘調査等の連絡調整及び文化庁施設の維持管理及び修繕等に対して提案、助言、連絡調整等協力し、文化庁の平城宮跡等整備事業に協力した。			
【年度実績概要】 (1)文化庁平城宮跡等管理事務所の文化庁施設の公開・活用等に対し、以下のとおり積極的に協力した。 ○文化庁施設の公開・活用に対して利用申込者との連絡調整 ○文化庁が実施する各種行事及び宮跡利用者による各種行事、発掘調査等に係る連絡調整 ・関係機関等視察対応 ○宮跡内施設(建物、諸設備、工作物等)の整備、維持管理及び修繕等に係る文化庁への助言 ・県道奈良精華線への歩道の設置計画 ・第一次大極殿見学者用スロープ改修工事 ・平城宮跡内電気設備(高圧ケーブル)更新整備 ・東院庭園池設備等更新整備 ・便益施設機能整備(便所設備等) ・東院庭園建物檜皮葺き替え設計 ・大極殿、東院庭園二重台風対策 ・遺構表示樹木(ツゲ)の剪定について ・大極殿点検及び清掃 ・大極殿高御座の修理等 ・大極殿内部展示修理 ・佐紀池の管理について ○住民等からの要望や意見の文化庁への取次ぎ ・平城宮跡への来訪者、利用者、近隣住民等からの防火、防犯、植生及び運営等の意見			
			
第一次大極殿見学者用スロープ改修工事風景			
【実績値】			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 6411

自己点検評価調書

研No.73

1. 定性的評価

観点	適時性	正確性				
評価	B	B				
<p>適時性：緊急性の高い事案に対して、提案、助言及び協力等を適時行った。</p> <p>正確性：現在の状況及び過去の経緯等に基づいた、提案、助言及び協力等を適切に行った。</p>						

2. 定量的評価

観点						
評価						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化庁平城宮跡管理事務所が行う文化庁施設の公開・活用等に積極的に協力し、文化庁の要請に応じ、文化庁施設の整備、維持管理及び修繕等に対して適時、的確に対応している。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化庁管理事務所が行う文化庁施設の公開・利用等の連絡、文化庁の各種行事、発掘調査等の連絡調整、文化庁施設の整備、維持管理及び修繕等の相談に対して適切に対応できている。また、文化庁施設（復原施設・便益施設等）の計画的整備に対しても現況に基づいた維持管理の提案、助言協力等が適切に行われている。

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	文化庁・国土交通省が行う平城宮跡の復原・整備への協力（(4)－①）		
【事業概要】			
(1) 国土交通省が行う平城宮跡第一次大極殿院復原への協力を行う。 (2) 文化庁と国土交通省が行う平城宮跡等の公開・活用事業への協力を行う。			
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長 小野健吉
【スタッフ】			
神野 恵、芝康次郎、庄田慎矢、浦 蓉子、尾野善裕、青木 敬、小田裕樹、今井晃樹、石田由紀子、川畑 純、 中川二美、渡邊晃宏、馬場 基、山本祥隆、箱崎和久、番 光、鈴木智大、松下迪生、中島咲紀、村山聡子、山本 崇、 清野孝之、森崎一貴、清野陽一、西山和宏、大林 潤、前川 歩（以上、都城発掘調査部）、林 良彦、海野 聡（以 上、文化遺産部）、小池伸彦、高妻洋成、脇谷草一郎（以上、埋蔵文化財センター）、上田浩司、田中康成、今西康益、 江川 正、三本松俊徳（以上、研究支援推進部）			
【主な成果】			
(1) 第一次大極殿院の建物復原研究のため、所内検討会及び有識者を招聘した検討会を開催し、記録集を作成した。 (2) 文化庁や国土交通省が開催する会議等に対して、専門的・技術的な援助・助言を行った。 <ul style="list-style-type: none"> ・文化庁や国土交通省と共催し、第一次大極殿院の復原整備についての講演会を開催した。 ・平成12年度までに行った平城宮跡の整備について報告書を作成した。 ・平城宮跡の整備設計・工事等に対して、設計条件の整理、提出資料に対する助言、立会調査等を実施した。 			
【年度実績概要】			
(1) 国土交通省が行う平城宮跡第一次大極殿院復原への協力 <ul style="list-style-type: none"> ・所内検討会を3回開催し、発掘遺構や現存建築などの資料収集と整理を行った。 ・有識者を招聘した瓦関係の検討会を3回開催し、助言を得て復原設計に反映させた。 第一次大極殿院の復原研究は、細部の検討を進めているが、今年度は建物の外観にも大きな影響がある鴟尾を中心とする瓦の検討を行い、現存建物には類例のない双頭双尾形式の回廊隅の鴟尾を復原することができた。 ・国土交通省が開催する「平城宮跡第一次大極殿院建造物復原整備検討委員会」において、第一次大極殿院の建物復原検討成果を発表した。 ・前年度及び本年度に行った上記の検討会の記録を冊子として発行した(①～④)。 ・文化庁記念物課が行う史跡等における歴史的建造物等の復元の取り扱いに関する専門委員会（「復元検討委員会」）に国土交通省が提出する資料作成について助言等を行った。 (2) 国土交通省や文化庁が行う平城宮跡等の公開・活用事業への協力 <ul style="list-style-type: none"> ・文化庁が開催する「平城宮跡及び藤原宮跡等の保存整備に関する検討委員会」に出席し、平城宮跡及び藤原宮跡の発掘調査について発表し助言を得、研究に反映した。 ・平城宮跡の整備の歴史、第一次大極殿院の位置づけ及び建物の復原について、「特別講演会 第一次大極殿院の復原整備」として一般向けの講演会を開催し、復原案を公表した(⑤)。 ・平城宮跡内の整備工事にあたり、発掘調査や立会調査を行って記録を作成した。 			
			
第60回所内検討会（遺物を見ながらの検討）			
【実績値】			
(1) 検討会開催数 6回（第一次大極殿院建物復原に関する所内検討会開催数3回、有識者招聘検討会開催数3回） 報告書の刊行 4冊(①～④) (2) 講演会の開催と発表 1回(⑤)			
（参考値）			
(2) 平城宮跡内の整備工事に伴う立会調査出動件数；18件 119日以上。 (2) 文化庁や国土交通省が開催する会議等への出席；3回			
【備考】			
①～②『第一次大極殿院復原検討会記録9』・『同10』（内部資料）26年8月。 ③～④『第一次大極殿院復原検討会記録11』・『同12』（内部資料）27年3月。 ④ 特別講演会『平城宮跡第一次大極殿院の復原整備』27年2月8日、当研究所講堂にて開催。当研究所の発表者2名。			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 6412

自己点検評価調査

研No.74

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：必要な検討を適時に行い、また有識者から有意義な助言等を得た。またこれらを復原設計に反映させた。文化庁や国土交通省の各種要請に対し、的確に対応することができた。 独創性：遺構と遺物の精緻な観察や分析、さらにそれらの総合的な学際的検討を行った。 発展性：『平城宮跡整備報告書』等の刊行により、今後の平城宮跡の整備・活用に資する基礎的資料をまとめた。講演会の開催により、一般市民の文化財研究・活用への理解・関心を高め、将来にわたる積極性を高めた。 効率性：事前に研究室内での検討を行い、所内検討会の論点を整理して、議論の効率化を図った。立会調査等にあたり、事前打ち合わせ等を通じて、作業効率の向上に努めた。 継続性：所内検討会の継続的開催、及び継続的な資料の収集や分析を、立会調査も含めて行った。 正確性：精緻な研究や分析に基づきつつ、かつ適宜外部有識者の意見を取り入れながら行った。各種の対応や助言は的確に行った。						

2. 定量的評価

観点	検討会開催数	講演会の開催と発表	報告書等の刊行			
評価	B	B	B			
判定理由 検討会開催数：目標回数6回を達成した。 講演会の開催と発表：当初計画にはなかった、講演会を1回行った 報告書等の刊行：目標件数検討会記録4件・報告書1件を達成した。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<ul style="list-style-type: none"> ・第一次大極殿院の復原研究を、計画通り行い、大きな成果を得た。また、検討会記録を、当初計画通りに刊行した ・整備に伴う立会調査等を、遅滞なく適切に行うことができた。 ・市民向け講演会を共催し、また発表を行って広く情報発信を行うことができた。 なお、講演会は当初計画にはなかったが、重要な活動と考える。 ・『平城宮跡整備報告書』を発行し、平城宮跡の整備の課題や今後の展望等を検討するための材料をまとめた。 以上より、定性的評価、定量的評価ともに成果が認められるため、Bと判定した。 次年度以降も、建物の装飾的細部や形式について、十分な検討を行ってゆく予定である。 今後も研究の成果をわかりやすく公表できるよう、さらに工夫をしていきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<ul style="list-style-type: none"> ・国土交通省が行う平城宮跡第一次大極殿院復原への協力ため、復原研究を着実に進めた。また、報告書を計画通り刊行した。 ・文化庁や国土交通省が行う平城宮跡の公開・活用事業に関連する会議等に参加した。また、報告書を刊行した。 ・文化庁や国土交通省が行う平城宮跡整備工事等への立会調査等を遅滞なく行った。 以上よりBと判定する。 なお、第一次大極殿院の建物復原研究では、実際に建物を建てるために細部形式の検討が必要になっている。文化財建造物保存技術協会等と連携しつつ、遅滞なく細部形式の決定を行っていききたい。また、これらの研究の成果を報告書としてまとめ、全国の遺跡整備の参考となるようにしていきたい。 平城宮跡全体の整備に対しても、文化庁や国土交通省と連携を図りながら、よりよい保存・整備・活用ができるよう尽力したい。

業務実績書

研No.75

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	国土交通省が行う国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地内の体験学習館の建設への協力((4)-①)		
【事業概要】 国土交通省が行う国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地内の体験学習館の建設とその展示に対して、助言・協力を行う。			
【担当部課】	飛鳥資料館	【プロジェクト責任者】	学芸室長 石橋茂登
【スタッフ】 西田紀子(学芸室研究員)、丹羽崇史(学芸室研究員)			
【主な成果】 (1) 国営飛鳥歴史公園事務所の依頼に基づき、キトラ古墳体験学習館の展示に資する奈文研所蔵資料一覧の中から実際に貸与可能な物件と、貸与の場合に求められる条件を提示した。 (2) 都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）と協力して国営飛鳥歴史公園事務所と展示内容について助言・協力を行った。			
【年度実績概要】 (1) 飛鳥資料館及び都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）が保管しているキトラ古墳関連の出土品、土層断面剥ぎ取り、レプリカ、再現品、陶板などをリストアップし、文化庁と協議の上、貸与可能な物件を提示した。その際、実物文化財を展示する場合は相応の管理体制、環境制御などが必要であることを示した。それらの情報に基づき、具体的な内容は国営飛鳥歴史公園事務所側が検討中である。 (2) 国営飛鳥歴史公園事務所から提示された体験学習館及び公園内解説パネル案について、学術的内容に関する助言と資料提供を、文化庁とともに、都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）と協力して行った。協議は計5回行い、展示構成に関する助言、解説内容に関する助言、必要な学術的資料の提供あるいは教示、解説パネルの原稿のチェックなどを行った。			
			
キトラ古墳 土層断面剥ぎ取り資料			
【実績値】 協議回数 5回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 6413

自己点検評価調査

研No.75

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：28年度開園にむけ作業が進む中で、展示、解説の内容を作成する過程で学術的な側面から協力することができた。 独創性：キトラ古墳、国営飛鳥歴史公園内檜隈地区の発掘調査と研究を継続してきた機関として、専門的知見を発揮できた。 発展性：わかりやすく解説するための関連情報の整理など、今後の当研究所の活動にも有益な情報を集めた。 効率性：定期的に文化庁、当研究所、国営飛鳥歴史公園事務所及び各種担当業者が介して協議することで、効率的に課題を洗い出して対応することができた。 継続性：昨年度まで継続してきた活動を踏まえて今年度から実際の展示内容の作成に動き出したものであり、来年度も継続し、開館に向けて活動を継続する必要がある、その体制が整っている。 正確性：調査研究を行ってきた当事者である当研究所が協力することで、文化庁の施策、国営公園の方針などに合致しつつ、学術的な正確さを確保できている。						

2. 定量的評価

観点	協議回数					
評定	B					
判定理由 協議回数：関係者が一堂に会する協議を5回実施し、十分な回数の協力をしていると判定できる。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	体験学習館及び公園内の展示・解説に関して、当研究所の保管する資料や知見の蓄積を活かして正確性を確保しつつ、効率的に協力することができた。 文化庁及び当研究所が行ってきた文化財保護と活用、調査研究活動について公園施設を通じて広く知っていただくことと、学術的成果を還元するという点でも有効な活動であり、次年度もさらに推進したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	計画どおり達成している。28年度の開館にむけ、さらに協力をすすめたい。

中期計画の項目	6 情報発信機能の強化		
プロジェクト名称	国土交通省が行う平城宮跡展示館（仮称）の建設への協力（6-(4)-①）		
【事業概要】 国土交通省が建設予定の平城宮跡展示館・詳覧ゾーンに関して、展示品の選定や展示内容の企画立案と、それらを効果的に行うための展示評価、類似展示施設の状況調査を実施する。			
【担当部課】	企画調整部展示企画室	【プロジェクト責任者】	企画調整部長 杉山洋
【スタッフ】 加藤真二(展示企画室長)、中川あや(展示企画室研究員)、渡邊淳子(前展示企画室アソシエイトフェロー)、中村 玲(展示企画室アソシエイトフェロー)			
【主な成果】 (1) 展示評価のためのアンケート調査、フォーカスグループインタビューを実施した。 (2) 遺跡立地型展示施設等にて展示手法の調査を実施した。 (3) 詳覧ゾーン基本設計の展示内容を一部修正し、展示候補品を再選定のうえ、リストと資料カードを作成した。			
【年度実績概要】 (1) 前年度にまとめた詳覧ゾーン基本設計案の課題等を克服するため、展示評価の各種調査を、展示評価の専門家とともに実施した。アンケート調査は、①通常遺物や文化財に接している非研究者、②平城宮跡資料館継続来館校を対象に、フォーカスグループインタビューは模型関連専門家、展示館近隣の小中学校教員、他施設異分野学芸員・展示関係者を対象に実施した。 (2) 遺跡立地型展示施設等の視察調査 平城宮跡展示館と同様、遺跡隣接型の展示施設について、展示施設と遺跡双方の関連づけ、誘導するための展示手法等について調査を行い、展示施設と遺跡が、双方を訪問したくなるような効果を狙って関連付けられている事例が少ない等の知見を得た。 (3) (1)と(2)の調査成果をふまえ、詳覧ゾーン基本設計展示案の見直しを行い、展示内容を一部修正した。修正案を元に、新たに展示室内平面図とスケッチ（パース）を作成した。また、新規の展示内容に基づいて、展示候補品を選定し、リストと資料カードを作成した。 ・ 詳覧ゾーン以外のゾーン（公園案内ゾーン、ガイダンスゾーン）の展示計画案について専門的な見地から指導をおこない、展示構成について詳覧ゾーンとのバランスや関連性について検証した。また、国土交通省が実施した当該ゾーン体験展示の展示評価について協力した。 ・ 前年度の詳覧ゾーン展示評価・視察調査の成果を論文として公表した。			
			
<p>フォーカスグループインタビューの様子</p>			
（参考値） 展示評価アンケート調査2回（回答数①83件、②14件）、フォーカスグループインタビュー調査3回（計11人）、他の博物館・展示施設の視察調査：32施設、 作製平面図10点・スケッチ9点、展示候補物資料カード249件 論文数：1件 国土交通省地方整備局国営飛鳥歴史公園事務所平城分室との定例会7回 平面図・スケッチ作成業者との打ち合わせ10回 展示評価専門家との打ち合わせ4回			
【備考】 中川あや・渡邊淳子・黒岩啓子「平城宮跡資料館来館者を対象とした展示評価調査と都城関連遺跡展示の現状と課題『奈良文化財研究所紀要2014』2014.6			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 6414

自己点検評価調査

研No.76

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
<p>判定理由</p> <p>適時性：27年秋に実施設計を迎えるにあたり、展示案の大幅な見直しが可能で最終年度である本年に、各種調査を実施し適切な修正を行うことができた。</p> <p>独創性：従来、平城宮跡内の展示施設は、高齢者や歴史愛好家を対象とした展示となっていたが、アンケート調査やフォーカスグループインタビューで、学習目的での来館利用度が高い小中学生層の志向を探ることで、従来とは異なる視点の、新たな展示内容を提案することができた。</p> <p>発展性：本年度の成果をもとに、次年度の実施設計にスムーズに臨むことが可能になった。</p> <p>効率性：前年度は国土交通省に業務委託された展示業者から、業務再委託を受けて展示内容の調整業務を行っていたが、今年度は、国土交通省から直接受託することで、国土交通省との情報共有や双方の意見交換を直接的に行うことができた。</p> <p>継続性：次年度の実施設計では、展示評価のうち製作途中評価の調査に進む予定であるが、25・26年度に展示評価（企画段階評価）を実施したことで問題意識を継続して持ち続け、一貫性のある調査が可能となる。</p> <p>正確性：展示評価のアンケート調査を、対象として抽出した人全員（学校全て）に行い、いずれも約9割の回答を得、データの網羅的な収集が叶った。また、展示候補品のリストを全点カード化し、それぞれの法量、画像などが確認できる基礎データを固めた。</p>						

2. 定量的評価

観点						
評定						
判定理由						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>詳覧ゾーン基本設計の見直しが可能な最終年度にあたり、各種調査を滞りなく行い、迅速に展示内容にフィードバックすることで、より魅力ある展示内容へと修正を実施することができた。これによって、次年度の実施設計に順調に進むことができるため、総合的評価としてはBと判断した。次年度も引き続き、展示評価等の調査を行い、成果を実施設計に反映していく予定である。</p>

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>25・26年度は、基本設計と実施設計の間の空白期間で、当初は基本設計の見直しが計画されていなかったが、この二か年、展示評価や視察調査を継続的に実施した結果、基本設計での課題を克服するための大幅な内容変更を行うことができた。基本設計の見直しを二か年かけて行ったことにより、来館者にとって平城宮跡についてより分かりやすく、より魅力が感じられる内容になったと考える。最終年度となる27年度は、実施設計が行われる予定であり、今期5ヵ年かけて検討を重ねてきた内容が実際の展示として効果的に結実するよう、内容詳細を固めていく予定である。</p>

業務実績書

研No.77

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	平城宮跡解説ボランティア事業の実施 ((4)-②)		
【事業概要】			
平城宮跡への来訪者に当研究所の調査研究の成果を発信するとともに、平城宮跡の歴史や文化財に対する理解を深めてもらうため、平城宮跡資料館や遺構展示館、東院庭園、朱雀門、第一次大極殿の復原建物等の案内・解説を行う平城宮跡解説ボランティアの運営を実施する。			
【担当部課】	研究支援推進部連携推進課	【プロジェクト責任者】	連携推進課長 田中康成
【スタッフ】			
加藤真二(展示企画室長)、中川あや(展示企画室研究員)、渡邊淳子(前企画展示室アソシエイトフェロー)、中村 玲(企画展示室アソシエイトフェロー)、松本正典(連携推進課課長補佐)			
【主な成果】			
高い知識に基づく解説をより多くの来訪者に効率よく行い、文化財への理解を大いに広げることができた。			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 定点解説のほか、予約及び当日受付した来訪者を対象に「ツアーガイド」として宮跡内散策に同行し解説を行った。 ・ 活動者に対しては、当研究所が主催する専門研修及び他機関の文化財に関するボランティアガイドが解説する場へ赴き、臨地研修を実施した。 ・ 活動拠点でもある平城宮跡資料館において、企画する展示ごとに展示趣旨の解説を、その都度当研究所研究員によって実施した。 			
			
平城宮跡解説ボランティアによるガイド風景			
【実績値】			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 平城宮跡解説ボランティア登録数：144名 (参考値) <ul style="list-style-type: none"> ・ ボランティア解説を受けた来場者延べ人数 83,773人 ・ 解説活動日数：308日 ・ 解説活動者延べ人数：3,915人(1日当たり：13人) ・ 解説ボランティアに対する学習会等回数：4回 <ul style="list-style-type: none"> 平城宮跡資料館夏期企画展の展示研修：1回 平城宮跡資料館秋期特別展の展示研修：1回 講演形式専門研修：1回 臨地ガイド研修：1回 			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 6421

自己点検評価調査

研No.77

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性	正確性	
評定	B	B	B	B	B	
判定理由 適時性：来訪者の様々な知識需要・必要性に対し、その場にて十分な対応ができた。 発展性：多種多様な層の来訪者へ解説ができ、海外からの来訪者に対しての反響は大きかった。 効率性：解説ガイド申込の際に、来訪者へのアドバイスなど行うことで、解説に係る時間的・人的投資は、効率よくできた。 継続性：年間を通して、とぎれず継続した解説者の配置を行うことができた。 正確性：研修で得た知識・経験を基に正確な情報を伝えることができた。						

2. 定量的評価

観点	平城宮跡解説ボランティア登録数					
評定	B					
判定理由 平城宮跡解説ボランティア登録数：ガイドに必要な人数が、十分に達成されている。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	ガイドに必要なボランティアを確保することができた。 解説ボランティアに対しては、特別展など展示内容の講習会や公開講演会への参加を通して、登録ボランティアの知識を高め、解説ボランティアガイドを行うにあたっては、来訪者に対し文化財の理解を広めることに大いに貢献した。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	解説するボランティアへの学習・研修の機会を提供し、そのレベル向上につなげ、広報による解説受講者数の増加を図ることなど、ボランティア運営の積極的な実施ができたと考える。 今後もこのペースを維持し、当研究所の情報発信、さらには平城宮跡の公開活用につながるよう力を注ぎたい。 次期中期計画に向けて27年度においては、新しく解説ボランティアを募集し、研修を行うことによって、登録ボランティアの育成を行う。

業務実績書

研No.78

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	平城宮跡防災・防犯パトロール「平城宮跡みまもり隊」への参加（(4)－③）		
【事業概要】平城宮跡内でのマナー向上や防災・防犯に関して、平城宮跡みまもり隊へ参加することにより、平城宮跡内でのマナー向上や防災・防犯に寄与する。			
【担当部課】	研究支援推進部研究支援課	【プロジェクト責任者】	研究支援課長 今西康益
【スタッフ】 江川 正(宮跡等活用支援係長)、三本松俊徳(宮跡等活用支援係係員)			
【主な成果】 平城宮跡来訪者に平城宮跡内でのマナーの向上や防災・防犯活動を行っていることを理解してもらうことができた。みまもり隊の活動が近隣住民、来訪者に浸透した結果、一般人の参加者が前年度を上回った。			
【年度実績概要】 平日は平城宮跡内を巡回し、火災や宮跡内にある看板等の毀損予防のパトロール活動を行った。月1回の土日のボランティア活動では、平城宮跡来訪者に防犯メッセージが書かれたティッシュペーパーの配布や声かけを行い、マナー向上や防災・防犯意識を高める活動を行う等、事務局として連絡調整を行った。 年1回、文化庁平城宮跡管理事務所、国土交通省国営飛鳥歴史公園事務所平城分室、奈良県、奈良市、所轄警察署及び所轄消防署の行政機関やNPO 法人平城宮跡サポートネットワークによる連絡会議を開催しパトロール活動の報告を行った。			
			
平城宮跡みまもり隊(青色パトロール)		平城宮跡みまもり隊(宮跡内巡回パトロール)	
【実績値】 平均参加者数：13.22人 一般参加者数：14人			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 処理番号

自己点検評価調査

研No.78

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性			
評定	B	B	B			
判定理由 適時性：時期によって異なる事案（行楽シーズン、花火等）に対して、啓発の方法・パトロール開始時間等を変更して活動を行った。 発展性：参加者はみまもり隊員に加え、一般市民も加わった。 継続性：毎月の活動日をあらかじめ設定し、定期的に行うことにより、参加者が欠員することなく、継続的に事業を行うことができた。						

2. 定量的評価

観点	平均参加者数	一般参加者数				
評定	B	B				
判定理由 平均参加者数：予定していた数の参加者を得た。 一般参加者数：一般の参加者についても、予定していた参加者に協力を得られた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	一般参加者数が年々増えてきており、従来の関係行政機関・NPO法人等だけで行う活動ではなくなってきている。次年度以降については、より一般の参加者を増やすために、近隣の自治会、学校等に働きかけたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	行政機関・NPO法人等以外の一般参加者数が増加しており、みまもり隊の活動が平城宮跡の利用者や近隣住民に浸透したと思われる。中期計画最終年度である次年度は、近隣自治会、学校等に働きかけ、一般の参加者を増やし、平城宮跡に係る地域活動にしたい。

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	NPO法人等への支援 (4)ー④		
【事業概要】			
平城宮跡で活動しようとする各種ボランティア、また文化財関係のボランティアに対して要請があれば、当研究所施設を活動の場所として提供することや、文化財に関する学習会等への講師の派遣を行う等の支援を行い、ボランティア団体の育成に寄与する。			
【担当部課】	研究支援推進部連携推進課	【プロジェクト責任者】	連携推進課長 田中康成
【スタッフ】			
松本正典(連携推進課課長補佐)			
【主な成果】			
ボランティア団体への支援は、その育成につながった。 第29回国民文化祭シンポジウムに招待されて、平城宮跡及び平城京と秋田城との繋がりを紹介するとともに、遺跡ボランティア団体などによる遺跡紹介や交流イベントに参加し、平城宮跡の現状と魅力を発表した。			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・「特定非営利活動法人平城宮跡サポートネットワーク」に対して、活動場所、講師の派遣、資料の提供など、積極的な活動支援を行った。 ・「子ども歴史教室」を共催で実施するとともに、「平城宮跡歴史講座」、「遺跡見学会」、「平城宮跡探検隊」を後援し、年間を通して連続した支援ができた。 			
			
平城宮跡探検隊 (どんぐり拾い)		講師派遣による遺跡見学会風景	
【実績値】			
(参考値)			
当研究所が支援し、ボランティアが実施した主な事業名称、回数、活動場所、従事ボランティア数、参加者数			
・「子ども歴史教室」、3回開催、平城宮跡資料館講堂・平城宮跡内、従事ボランティア数延べ22名、参加者数32名			
・「平城宮跡歴史講座」(講演会)、3回開催、平城宮跡資料館講堂、従事ボランティア数延べ45名、参加者数542名			
・「遺跡見学会」、2回開催、従事ボランティア数延べ10名、参加者数18名(講師派遣)			
・「平城宮跡探検隊」、1回開催、従事ボランティア数延べ13名、参加者数65名			
・「萬葉集」勉強会、12回開催、平城宮跡資料館小講堂、従事ボランティア数延べ184名、参加者数延べ196名			
・「続日本記」読書会、12回開催、平城宮跡資料館小講堂、従事ボランティア数延べ210名、参加者数延べ210名			
【備考】			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 6441

自己点検評価調書

研No.79

1. 定性的評価

観点	発展性	効率性	継続性			
評定	B	B	B			
判定理由 発展性：子供たち等の将来につながる好影響のある体験学習が実施された。 効率性：当研究所の施設を有効かつ効果的に使用し、参加者への広報・成果発表につながった。 継続性：NPO法人への支援事業は、特定非営利活動法人平城宮跡サポートネットワークが13年11月に認証されて以降、継続的に実施されてきた。						

2. 定量的評価

観点						
評定						
判定理由						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	特定非営利活動法人平城宮跡サポートネットワークが実施する子ども歴史教室、平城宮跡探検隊、平城宮跡歴史文化講座等への講師派遣、活動場所提供等の支援を行い、協力することによりその活動の活性化に貢献した。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	ボランティア団体の活動要請に対し、地元コミュニティの活動に対しても積極的に支援し、各事業が行われた。 今後も各種ボランティア育成とともに、次期中期計画に向けた27年度において、文部科学省の「土曜学習応援団」に賛同し、その事業にも寄与していきたい。